

テレポーター・ション・マン 4 登場人物

岡田鉄男（ ）テレポーター・ション・マン

ジョン・ダーウェル（82）農業学者

テレビ・アナウンサー（45）

ゴードン・ローリン（59）危機管理主幹

メラニー・シングルトン（58）市長

ダニエル・アルメンダリス（61）

東キャンナル大学学長

ライアン・ホール（45）保安官

クリスティン・コートニー（48）市議会議長

イ・ソア（29）韓国系メカニック

通信士（23）

グレゴリー・フラナリー（35）パイロット

ジェシー（41）パイロット・ステフの夫

キャリー（9）ステフの娘

アイアン（3）ステフの長男

ステファニー・ミラン（ ）医師

リンカーン マーズ54号コンピュータ

オリン マーズ53号コンピュータ

クリシュナ（マリウス月面基地管理官 52）							
オチョア（33）月からの53号火星移住者							
代表							
ブルーノ・アーチャー（39パイロット）							
	月からの54号火星移住者代表						
来 ^{くる} 栖 ^す さくら（28）鉄男の子孫							
来栖あやめ（25）鉄男の子孫							
川田幸子（33）JAXA職員							
キンメル（47）54号搭乗者							
ブラウリー夫妻	タンゴ舞踊家						

テレポーターション・マン 4

T 2146年 火星東キャナル市

—

○ ジョンと鉄男の家（朝・外観）

○ その家の居間（朝）

ジョン・ダーウエル（82 農業学者）

と岡田鉄男（38 テレポーターショ

ン・マン）が朝食を食べ終える。

壁のテレビは朝のニュース。

ジョン「今日の予定は？」

鉄男「危機管理の仕事がここのところ無くて」

ジョン「じゃ、じゃがいも掘りを手伝わない

か？」

鉄男「いいですよ。」

体を動かした方が調子がいいから」

その時、テレビの臨時ニュースが。

アナウンサー（45）「昨日、月のマリウス基

地から、地球に向けて、支援物資の緊急要

請が入りました。

このところ定期のムーン・ライナーが
滞り、食糧品や研究資材の不足が際立っ
ていました。

これについてN A S Aは、アメリカとアラ
ブとロシアの戦争のため。ほとんどのロケ
ットがミサイルに特化したためと釈明し
ております。

国連では・・・」

ニュースは連綿と続く。

ジョン「これは大変だ。

月は農業基盤が脆弱で、いつまで持つか」
考え込む二人。

そのとき鉄男の携帯電話が鳴る。

鉄男「はい、お早うございます」

ゴードン・ローリン（59 危機管理主幹）

「岡田さん、至急こちらへ来てもらえない
か？」

鉄男「何事ですか？」

ローリン「それはこっちで話す。

込み入っているから」

鉄男「わかりました、では」

電話を切る鉄男。

鉄男「じゃがいも掘りは別の日に。」

勤務です」

ジョン「そうか、わかった」

○東キャナル市危機管理室

ノックとともに鉄男入ってくる。

メラニー・シングルトン（58 市長）

「おはよう。」

急に呼び立ててごめんなさい。

テレビで月のニュース、見ました？」

鉄男「はい」

シングルトン「そのことで皆さんをお呼びし

ました。

地球の火星協会から、マーズ号2機で月に

暮らす人たちを助けて欲しいと」

ダニエル・アルメンダリス（61 東キャナ

ル大学学長）「やっぱり。」

そうじゃないかと思ったんだ」

鉄男「助けるって・・・」

シングルトン「もう、ここ何年かは地球から宇宙船を飛ばすことはほとんどできないだろうと。」

だからこのままでは月の住人の命が脅かされるので、彼らを火星に運んでほしいと、そういうことです」

鉄男「それって、可能なんですか」

アルメンダリス「いろいろ問題はあられるけども不可能ではない」

ライアン・ホール（45 保安官）「どんな問題があるのですか」

アルメンダリス「今、マーズ号母船2機は火星の軌道上に浮かんでいる。

最後に飛行してから5年たっているから、整備しなおさなくてはならない」

ホール「5年！」

アルメンダリス「そう、5年。」

機体全体の点検をして飛べるかどうかをね」

鉄男「いったい、月には何人ぐらい人が居るんですか」

シングルトン「176人よ」

鉄男「176人！」

それじゃマーズ号2機では運びきれない。

2機の定員は112人でしたよね」

シングルトン「そう。

だから1機に余分に32人乗せなきゃならない」

ローリン「定員の内、1機の乗組員はそれぞれ6人だったけど、それを火星から飛び立つときはそれぞれ1人にすると、増える人数は1機あたり27人減らせる」

ホール「1人って、それで月まで大丈夫なんですか」

ローリン「もともとマーズ号母船は、地球に帰るときは、人間は乗らずに、コンピュータがコントロールするから」

ホール「あ、そうでしたね」

ローリン「だから、一部屋当たりほぼ3人増

える。

これだとまあ大丈夫だろう」

ホール「だけど人数が増えると、加速が．．」

アルメンダリス「今回は貨物機を搭載してないから、その点は大丈夫」

鉄男「食料は？」

ローリン「マーズ号2機は、7年前、ロシアの乗っ取りを防ぐため、移住者を乗せずに火星に來たから、食糧はほとんど手付かずに残っている。

マーズ51号の資材庫CとDの食糧だけは、多分ロシア兵が食べてしまっただろうからその分と、両方の乗組員用食料は、補充しないといけない。

マーズ号の宇宙食は保存期限25年だから、残っている分はまだ食べられる。

足りない分だけ製造して積み込む」

ホール「それと衣類」

シングルトン「月の住人176人と乗組員2人の8か月分。

スラックスとポロシャツと下着と生理用品。
これも積み込んで使わずにそのままのがあるから、少しの補充でいける」

クリスティン・コートニー（４８ 市議会議員）あの、こんなときに何だけど、私たちが移住してきたときブラジャーってありましたっけ」

鉄男「私の時にはありませんでしたよ」

コートニー「男のあなたがなぜ知ってるの」

鉄男「えっ？ あ、ああ、あの・・・」

ホール「（ニヤニヤしながら）知ってるよね。」

岡田君。

もちろん知ってるとも」

シングルトン「ホール、いじめないで」

ホール「いや、すまん」

シングルトン「最初のときはあったけど、マーズ３号からブラジャー兼用のフィットアンダーウェアに」

コートニー「そう、そうだったわね。」

思い出した」

鉄男「水は？」

ローリン「これも使った分だけ補充すればいい。」

とはいうものの、この水の運搬がたいへんなんだ。

水の総トン数は、3年後の月から火星への8か月の飛行で、1機20トン。

足りないのは多分4トン。
食糧の運搬なんか比べ物にならない」

アルメンダリス「それと着陸船」

ローリン「それは大丈夫だ。」

マーズ号の着陸船はすでに地球軌道上に打ち上げられているから、それを月に引っ張ってくればいい」

シングルトン「フウツ、ため息が出るわね。
でもやらないと」

アルメンダリス「火星大接近は、実は今年2146年。」

今年の火星から月までの飛行時間は6か月。

その2年後の月から火星までの飛行時間は8か月。

今から火星出発までの期限は約2か月」

シングルトン「それぞれ問題ごとに委員会を作って、計画案を作りましょう」

○市・通信室

部屋には鉄男、ローリン、通信士、

それと女性メカニックのイ・ソア（2

9 韓国系）が座ってモニターを見ている。

ローリン「まず、2機のマーズ母船が航行可能かどうかチェックするために集まっていたきました。

こちらはメカニックのイ・ソアさん。

マーズ号の隅々までご存じの方です。

じゃあ、始めてください」

イ・ソア「では、まずマーズ母船のリンカーンを呼び出してください」

通信士（23）、うなずいてパネルを操

作。

モニターにマーズ号のホイール操縦室が映し出される。

通信士「リンカーン、応答してください」

待つこと10秒足らず、リンカーンの声が響く。

リンカーン（Aーコンピューター）「連絡いただいてありがとうございます。」

あ、岡田さん、お元気ですか」

鉄男「ありがとうございます。」

あなたはとうですか」

リンカーン「はい、すこぶる順調です」

イ・ソア「今日は、あなたの機体に損傷がないか調べるために連絡しました。

自己診断で、なにかの不具合は見つかっていますか」

リンカーン「私は1日1回必ず総点検を行っています。

今のところの問題は3つ」

イ・ソア「それは」

リンカーン「太陽光発電パネルのセルが7つ、メテオロイドにやられて破損しています。」

電流回路は1つのセルが壊れても近接の回路を使うため、支障ありません」

イ・ソア「予備のセルはありましたよね。なぜ交換しないのですか」

リンカーン「それは、2つ目の問題点で、バッテリー不調で、ロボットを動かせないからです」

ローリン「そうか、5年もロボットが壁の充電器に接続したままだと、バッテリー性能が落ちてゆく」

リンカーン「私には体がありませんから、予備のバッテリーに交換することもできません」

イ・ソア「これは大きな問題ね」

リンカーン「あと、ホイールの回転を支える軸受けの部分に異常な振動があります」

イ・ソア「油圧のトラブルかも。」

これは行って見ないと分からない」

ローリン「もう建造されて100年以上経っているから、限界かな」

イ・ソア「そうですね。

マーズ号母船は、いままで8回も改修をやってきたけど、もし航海できても、これが最後になるでしょうね。

リンカーン、ほかには？」

リンカーン「それだけです」

イ・ソア「わかりました。

近々伺って整備します。

有難う」

リンカーン「どういたしまして。

お越しをお待ちしています」

ソア、通信士に目配せして通信を終える。

ソア「次は、もう1機のオリン」

通信回線がしばらくして開く。

オリン（アイコンピューター）「ソアさん、お久しぶりです」

ソア「そうですね。

今日は君のシステムの調査です。

不具合はありませんか」

リンカーン「ロボットのバッテリーが・・・」
と話は続いてゆく。

T「20日後」

○マーズ54号母船

○54号のホイール操縦室

ジェシーとソアが、壁のAーロボット、

アイオンを外している。

そばでこれを見ている鉄男。

ソア「バッテリーが液漏れしている。

とにかくバッテリーを外さない」と

二人でアイオンの両肩を支えて床に、

うつぶせに倒す。

六角レンチで40cm四方のカバーと

バッテリーを外す。

さらに洗浄液で接点を洗う。

乾いた布で接点を磨き、新しいバッテリーとカバーを取り付ける。

ジェシー「アイオンを起こそう」

二人してロボットを起こし、壁の充電器に接触させる。

途端にブーンというファンの音が。

ソア、アイオンの胸を開き、再起動スイッチを押す。

3分後、アイオンの瞳に光が灯る。

ソア「どう？ アイオン、大丈夫？」

アイオン「おはようございます。

皆さんお揃いでなんですか」

ソア「君は長い間眠っていたのよ。

今充電しているから、それが終わったらま

た話しましょう」

アイオン「わかりました」

ジェシー「次はホイール回転軸だな。

まずカメラで見てみよう」

操作卓でカメラを動かす。

T（1か月後）

○東キヤナル宇宙空港（朝）

宇宙船発射場に、かって使われた火星
着陸船が、両側にブースターを繋がれ
て立っている。

そこへホバーが一台近づく。

扉が開いて、宇宙服の鉄男と、グレゴ
リー・フラナリー（35パイロット）
がゆっくり降りてくる。

寄り添ったローリンが声を掛ける。

ローリン「大丈夫ですか」

鉄男「大丈夫です。

この水を、マーズ母船に届けてきます」

ローリン「ええっ、なんて言った。

宇宙服は気密だから聞こえない」

鉄男、宇宙服の太い指で丸を。

ローリン「わかった。

頼んだよ」

頷く鉄男。

ローリンはホバーに乗って管制塔へ。

○管制塔

部屋には、管制官と、ローリン、ソアが居る。

ソアがマイクを取り上げる。

ソア「岡田さん、準備はいいですか」

スピーカーから鉄男の声が。

鉄男「いいです。

じゃ、行ってきます」

○操縦室（早朝）

モニターを見上げる鉄男。

濃い緑のはるかな空に、2つの銀色の

点が光っている。

鉄男「マーズ号だ」

フラナリー「さあ、行こう」

○マーズ母船2機の浮かぶ宇宙

マーズ号は静止して浮かんでいる。

ホイールは回転を止め、太陽光パネル

は折りたたまれている。

2機のホイール・エアロックから2体のロボットが出てくる。

まずマーズ53号の母船の金具にテザーでロープを固定し、ホイールの内側に巻かれている蛇腹パイプの固定バンドを解き、先端のノズルを掴んでエアを噴射し、給水船に近づく。

ローリン「(地上の管制室からの声)あのパイプ、宇宙のマイナス270度の低温に負けないのかなあ。

少しでも隙間があると瞬時に水が凍ってしまうぞ」

ソア「主にシリコン製で、さらに温められていますから大丈夫です」

給水船の挿入口にパイプを差し込み、固定する。

水を温めるスイッチを入れるロボット。

○マーズ53号のホイール操縦室

操作卓の前にジェシーがシートベルトで体を固定し座っている。

アイオン（ロボット）「導水パイプ、接続完了しました」

ジェシー（41パイロット）「OK。」

導水開始」

カバーを外してスイッチを入れる。

天井から水の流れる音が聞こえる。

流入量上限を入力。

30分後

ジェシー、導水スイッチが切れたことを確認。

ジェシー「アイオン、導水パイプを外せ」

アイオン「わかりました」

○マーズ53号の浮かぶ宇宙

アイオン、導水パイプのスライドキャ

ップを閉め、パイプ固定をはずして、引き抜く。

と同時に高温の凍結防止ガスが水の取り出し口から噴き出る。

アイオン、パイプを手繰り寄せ、ホイールの上に固定する。

ジェシー「フラナリー、船をマーズ54号に近づけてくれ」

フラナリー「分かった」

（1時間後）

○マーズ54号のホイール操縦室

ジェシー「テツツオ、水の積み込みが終わった」

鉄男「了解。」

じゃあ、帰るから君も給水船に移ってくれ」

ジェシー「OK！」

○東キャナル市住宅街

○ ジェシーとステフの家 外観

○ 家の玄関

鉄男とジョンが近づく。

ノック。

しばらくして、キャリーがドアを開く。

キャリー（9 ステフの娘）「あっ、テッツ

オ！」

鉄男「久しぶりだね。

また一段と大きくなって。

身長何センチ？」

キャリー「160cm」

鉄男「そんなに！

何歳だっけ」

ジョン「9歳だよ。

覚えてないの？」

鉄男「ああ、そうか。

そうだよね」

と、そのときジェシーとステフも出てくる。

ステフの胸にはかわいい男の子。

鉄男「こんにちは。

今日はお招きいただいて恐縮です」

ステファニー・ミラン（38 医師）「かたくるしい挨拶はいいから、さあどうぞ」

○居間

鉄男「その子、名前アイアン（3）だったっけ」

ステフ「そうよ、あなたの名前から付けたんだから、覚えてよ」

鉄男「やあ、すまん、すまん」

ステフ「ジョン、いらっしやい。

1 年ぶりね。

元気？」

ジョン「うん、元気だ。

その子、何歳？」

ジェシー「3 歳ですよ」

ジョン「そうか、もうそんなになるのか。

こんにちは、アイアン」

アイアン（3 歳 ジェシーとステフの長男）

「こんにちは」

ジョン「ちゃんと挨拶できるんだね」

ステフ「さあ、お掛けなさい」

と、アイアンを床に下ろし、キッチンへ。

アイアン、トコトコと走ってキャリーの跡を追う。

キャリー「テツツオ、ライン・レスリングしよう」

鉄男「そうだね。久しぶりにやるか」

キャリー、細い糸を床に一直線に広げる。

鉄男とキャリーはその糸の上に立って右手同士を握る。

鉄男「いくぞ」

鉄男、キャリーの手を引っ張って、線から外そうとする。

キャリー、しなやかに体を曲げてそれを避け、代わりに鉄男の腕を反対方向に。

鉄男「おっとと」

今度は鉄男が下に手を引っ張る。

かろうじて踏みとどまったキャリーは、腕を上引き上げ、急に左へ振り下ろす。

するとたまたま鉄男の体はドテンと

転んでしまう。

キャリー「どう？

強いでしょう」

鉄男「ほんとだな、本気でやったのに」

アイアン「お姉ちゃん、僕もやる」

と、ラインの上に立つ。

ジョン「よし、おじいさんとやろう」

ジョン、アイアンの手を握る。

アイアン、思い切り手を引っ張る。

ジョン「おお、あぶない、あぶない」

踏みとどまるも、あきらめないアイア

ン。

アイアン「えい！」

今度は手を押し戻す。

ジョン「うわあ！」

彼も転んでしまう。

アイアン「勝った、勝った！」

ジェシー「こんどはダディとやろう」

キャリー「こんどはテッツオとやってよ。

どっちが強いか」

鉄男「よし、初めての対戦だ」

アイアン「ダディ、勝って！」

キャリー「ダディ、フェイントかければ大

丈夫よ」

そこへ料理を運んできたステフも

ステフ「あなた、がんばって」

鉄男「ちょっと待ってよ。

私を応援する人はいないのかい」

ジョン「しかたがない。

テッツオ、勝つんだぞ」

鉄男「しかたがないだって。

えらく気乗りのしない応援だな。

まあいい、勝って見せる」

お互いフェイントをかけ合い、押した

り引いたり。

そのとき玄関のチャイムが鳴る。

それに気を取られた鉄男はドスンと倒れる。

ジェシー「あっさり勝っちゃった」

鉄男「ちょっと待って」

と玄関に走ってゆく。

ドアを開けるとイ・ソアがバラの花束を持って立っていた。

鉄男「よく来たね、さあ、こちらへ」

と居間へ招き入れる。

鉄男「みんな、この人が私と共に月へ向かう

いさんだ」

ソア「はじめまして。

イ・ソアです。

今日はお招きにあずかり恐縮です。

よそ者の私がかがうのは気が引けたので

すが、岡田さんのたつてのお誘いで、やっ

てきました」

ステフ「テッソオからあなたのことは伺って

いました」

ジョン「ほんとに良く来てくれた。

月への壮行会にあなたがいないのは、それこそ淋しい」

キャリー「その花は、お土産？」

スア「ええ、そうよ。

さあ、どうぞ」

キャリー「ありがとう」

受け取るキャリー。

キャリー「花瓶に生けてくるね」

と、花束を抱いて、台所へ。

追いかけるアイアン。

ステフ「二人で同じマーズ号に乗るの？」

ソア「いいえ、54号に岡田さん、53号に

私が乗ります」

ステフ「広いマーズ号に一人づつ、これもま

た淋しいわね。

私もキャリーと二人だけで2年ほど生活し

たけど」

鉄男「たぶん今度の飛行が最後だと言ってま

した。

だ い ぶ 古 い の で ー

ジ ョ ン ー 大 丈 夫 か い 、 そ ん な に 古 く て ー

ソ ア ー ー 応 主 な 部 品 は 積 ん で ま す か ら ー

ジ ェ シ ー ー 君 は マ ー ズ 号 の す べ て を 知 っ い る
の か い ー

ソ ア ー す べ て で は あ り ま せ ん 。

部 品 の 数 も た い へ ん な 数 で 、 わ か ら な い と
こ ろ は マ ニ ュ ア ル で 探 せ ま す ー

ジ ェ シ ー ー ほ ん と は 私 が 行 き た か っ た ん だ け
ど ー

ス テ フ ー だ め よ 。

あ な た に は 二 人 の 子 供 が 居 る ん だ か ら ー

鉄 男 ー そ う だ 。

今 回 は バ イ ロ ッ ト よ り も メ カ ニ ッ ク が 必 要
だ か ら ー

ス テ フ ー 話 は そ れ く ら い に し て 、 食 事 し ま し
よ う ー

テ ー ブ ル に は 、 い ろ い ろ な 種 類 の サ ン
ド イ ッ チ と ビ ー ル 、 ジ ュ ー ス ・ 果 物 が 。

ジョン、ビールの栓を開けて

ジョン「今度も二人が無事帰ってきますように。」

乾杯」

みんな手に手に祝杯を。

ステフ「今度の旅は、どうぞテレポーターシ

ョンが使われませんように。

もし、使われたら、帰って来た時はみんな

この世にいないんだから」

ジェシー「そうだ。」

それだけは・・・」

その場は静まりかえる。

鉄男「それは私も考えた。

よほどのことが無い限りテレポーターはしな

いつもりだ」

ジェシー「湿っぽくなったね。

歌でも歌おう。

さあ、ステフ」

二人は立ち上がり手に手を取って歌いだす。

曲は今はやりの「アマゾニスの湖で」
をユニゾンで歌いだす。

キャリーも傍によって三重奏。

アイアンも歌詞がわからないながら
に声を出す。

ソア「じゃ、私も」

とソアがハーモナイズした音程で歌
い始める

驚く鉄男

こうして歌が終わる

一斉に拍手の嵐。

ステフ「お上手ね。」

音楽の勉強をしたの？

ソア「亡くなった母が音楽の教師でした」

ステフ「そうなの。」

違う音程でハーモナイズするって素敵ね。

うらやましい」

ソア「そんなに難しくありませんよ。」

今度一緒に練習しましょうか」

ステフ「えっ、ほんと？」

それは楽しみだわ」

ジェシー「それも帰って来てからの話だ」

ステフ「そうね」

鉄男「板子一枚下は地獄って言葉が日本語に

あるけど、海を渡る船も、宇宙船も同じだ。

なにがあるかわからない。

ただただ無事に帰ってくることを祈ろう」

またもその場はシーンとなる。

ジョン「縁起でもないことを言うなよ。

大丈夫だから」

鉄男「うん」

ジョン「じゃあ、私の番だ」

ジョンは、ビールを飲み干して歌い始める。

曲は（サーフィンU・S・A）

またもみんなが手を叩き、手を振り

腰を振り。

曲が終わると、疲れたのかジョンは

椅子へ。

ジェシー「ジョンはビーチボーイズ・オンリーだな」

○ジェシーの家の外

みんなが家から出てくる。

ジョン「今日はごちそうになった。

ありがとう。

帰ってきたらまた集まろう。

マーズ8号同窓会だ」

ステフ「そうね、帰ってきたら」

ジョンと鉄男とソアは並んで手を振り、別れを告げ、歩き始める。

○東キャナル宇宙空港

マーズ・シャトルの打ち上げが開始。

空高く上昇するマーズ・シャトル。

○マーズ53号の傍

ホイールのエアロックにシャトルがドッキング。

○マーズ53号ホイール・エアロック

マーズシャトルの天井から、ソアがはい出る。

シートから鉄男が声を掛ける。

鉄男「すぐ連絡するから」

ソア「ええ」

エアロックの隔壁が閉じられる。

○マーズ母船が2機浮かぶ宇宙

マーズ53号から離れるシャトル。

方向転換して54号に近づく。

○マーズ54号エアロック

鉄男がエアロックのボタンに指を置く。

鉄男「ジェシー、元気だね」

ジェシー「3年後にまた逢おう。

じおあ」

鉄男、エアロックの隔壁を閉じる。

泳いで隣の操縦室へ。

54号から離れ、火星に戻るシャトル。

○マーズ54号操縦室

鉄男「リンカーン、こんにちは」

リンカーン「岡田さん、こんにちは」

鉄男「こんにちは」。

早速だが、ホイールを回転してくれ」

リンカーン「わかりました」

しばらくして、ゆっくりとホイールが

回転を始め、鉄男の足が床に着く。

鉄男「マーズ53号との通信回線を開いてく

れ」

モニターに53号の操縦室が映し出される。

すでに操作卓に座って忙しくキーボードをたたくソアの姿。

鉄男「ソア、こっちも乗船したよ」

気が付いたソア、にっこり笑って

ソア「そう、よかった」。

これから3年、よろしくね」

鉄男「どうだろう、この通信回線は常時開けておかないか。」

そうすれば、いつも二人で仕事している気分になる。

別にずっと話し続ける必要はない。

お互いが居るだけで心が安らぐから」

ソア「私もそれを提案しようと思っていたの。

たちまちこの仕事をやってしまうから」

鉄男「その前にマーズ号を発進させよう」

ソア「そうね。」

リンカーン、オリン、マーズ号を発進させて」

リンカーン「わかりました」

オリン「わかりました」

鉄男「私は、火星から運び込んだ資材の整理をはじめめる。」

じゃ、お昼ご飯の時に逢おう」

ソア「ええ」

○マーズ54号資材庫D

ルームEとの隔壁が開き、鉄男が入ってくる。

ロシア兵の食い荒らした食品包装がたぐさん散らばっている。

鉄男 M

「これは掃除から始めないと」

資材庫のネットの中からゴミ袋を見つけて出し、ゴミを袋の中に。

傍にあった床掃除機を駆動させ、自動で部屋の掃除をさせる。

○マーズ54号・ルームD

資材庫Dとの隔壁が開き、ゴミ袋と掃除機を持った鉄男が入ってくる。

そして掃除を続ける。

○マーズ54号医務室

掃除が続いている鉄男。

スピーカーからアナウンスが。

ソア「鉄男、お昼ご飯よ」

鉄男「もう、そんな時間か。」

わかった」

○マーズ54号操縦室

モニターに、ソアのテーブルについている姿。

食材を広げる鉄男。

鉄男「お待たせしました。

では頂きましょう」

ソア「それ、なに？」

鉄男「ビーフステーキと、コーンチャーハン。

君のは？」

ソア「野菜たっぷりの石焼風ビビンバ。

ビーフって、火星の食材じゃないわね」

鉄男「もちろん地球製造のもの。

この旅が無ければ、一生食べられなかった。

牛も豚も、火星では育てられないから。

ビビンバには肉入っているの？」

ソア「鶏肉のそばが入ってる。

もしかしたらこれ火星で作ったものかしら」

鉄男「53号の乗組員用資材は、火星で積み

込んだものがほとんどだから、たぶんそう
だろう。

おいしい？」

ソア「それなりにね。

故郷の味には遠く及ばない。

深く考えると悲しくなるから、考えないよ
うにしてるの」

鉄男「話は変わるけど、映画で見ていると、
ソウルって坂道だらけだね。

行ったことないから、ほんとかどうか知り
たいな」

ソア「そうよ、年寄りには辛いわね」

鉄男「足腰は丈夫になるな。

君は、ソウルで暮らしていたの？」

ソア「10歳からカナダ暮らし。

だから故郷はどちらかと言うとカナダ」

鉄男「カナダも行って見たかったな。

今では叶わぬ夢だけだね。

さっきまで何してたの？」

ソア「マーズ号の自己診断記録を見ていたの」

鉄男「なにか問題は？」

ソア「おおむね良好よ。」

でも突然何か起こるかもしれない。

古いからね」

鉄男「怖いね」

ソア「うん」

○マーズ54号操縦室

ベッドルームの戸が開いて鉄男が出て

くる。

操作卓の時計を見る。

鉄男「もう2時か。」

昼寝にはちよつと長かったな」

操作卓のモニターにソアが現れる。

ソア「鉄男、バドミントンしない？」

鉄男「バドミントンって、なに」

ソア「バドミントン・ゲームよ」

鉄男「そんなのあるのか。」

やりたいな」

ソア「壁に掛かっている小さなラケットがあ

るでしょ」

鉄男「ああ、これ」

ソア「右側の壁に赤いボタンがあるでしょ。

それを押して」

言われた通り押すと向かいの壁面に、
木立に囲まれたバドミントンコート
が船室の壁に現れる。

鉄男「へエッ！

これは驚いた。

マーズ8号には、こんな無かった」

ソア「こっちを見て」

鉄男「えっ？」

見ると、左のほうからソアがラケット
を持って現れる。

ソア「合成よ。

これでほんとにプレイしてるようになるの」

鉄男「こりゃあいいな。

早速やろう」

突然目の前にバドミントンの羽根が現
れる。

ソア「打って！」

鉄男「おお、よし！」

鉄男が小さなラケットを振ると、手に打った衝撃音が伝わり、羽根は、壁面のソアの方へ飛んで行く。

ソアが打ち返し、羽根は鉄男の左に。

再びネット際に打ち返す。

ソアが高く打ち返す、

鉄男、高くジャンプして打ち返す。

ソア「だめよ、テレポーターション使っちゃ。ルール違反よ」

鉄男「テレポーターしていないよ。」

重力が低いから高くまで跳べるんだ」

ソア「じゃ私も」

と、ソアも高くジャンプして打ち込む。

ソア「ほんとだ。」

こんなに跳べるのね」

鉄男、かろうじて羽根を拾うも、弾はコート外。

こうしてラリーは続いてゆく。

スクリーンのカウントが、ソアに21
が表示されたとき、

ソア「もうやめましょう。」

疲れた」

鉄男「私はまだいけるけどね」

ソア「仕事もあるから。」

コーヒー1杯のんで終わりましたよう」

コートの画像が消える。

ソア、温めておいたコーヒーをレンジ

から取り出し、飲み始める。

鉄男、モニターのソアを見ながら、自

分のコーヒーを飲み始める。

鉄男「あ……名前の呼び方なんだけどね」

ソア「名前？」

鉄男「うん。」

今まで、君は私のことを鉄男と呼び、私は
君のことをソアと呼んでたけど、これって
呼び捨てだよね。

いくら親しいと言っても呼び捨てはどうか
と
思
っ
て
。

これから君のことをソアちゃん、私のことを鉄ちゃんと呼ぶようにしたいと思うんだけど、どう？」

ソア「（ちゃん）を付けるのね。

（ちゃん）って・・・」

鉄男「日本では子供のころ、みんな名前に（ちゃん）をつけて呼んでいたんだ。

いわゆる愛称だね」

ソア「韓国では（シ）なんかをくつつけるけど、いいわ、それで行きましょう。

鉄ちゃん！」

鉄男「ソアちゃん」

ソア「鉄ちゃん」

鉄男「ソアちゃん」

ソア「鉄ちゃん」

鉄男「もういいよ。

いつまでたっても終わらない。

じゃあね」

鉄男、飲みかけのコーヒーをテーブルに残したまま、部屋を出る。

○資材庫D

鉄男、壁から短いロープに繋がれた

資材の網を解いてゆく。

そして部屋の何列にも別れた棚に、資材のネームプレートに従いながら、同じネームプレートの棚に収納し、それに網の蓋をひっかけてゆく。

そして部屋の隅の一番大きい梱包の

前へ。

引っ張って見たけど動かない。

鉄男「重いなあ、そんなに大きくないのに。

何キロあるんだろう」

もう一度引いてみる。

びくともしない。

鉄男「レポートしてもいいけど、少しずつれと棚を壊してしまうかも。

リンカーン」

リンカーン「何でしょうか」

鉄男「しばらくホイールの回転を止めてくれ」

リンカーン「わかりました」

しばらくして、その梱包がフワッと浮き上がる。

それを引っ張って棚の前へ。

鉄男「あっ、しまった」

あわてて操縦室へテレポート。

○マーズ54号ホイール操縦室

突然現れる鉄男。

そこには倒れたコーヒーカップから溢れたコーヒーが、大小の球となって浮かんでいた。

鉄男「これはまずい」

鉄男、空中に浮遊しながら、そのコーヒーの球を口で吸い取ってゆく。

マーズ53号のソアがそれを見付けてモニター越しに

ソア「鉄ちゃん、なにしてるの？」

鉄男「こぼれたコーヒーを吸い取ってるんだ」

ソア、それをしばらく眺めてから、大

声で笑いだす。

ソア「馬鹿ね、

まるで魚が餌を食べてるようだわ」

鉄男「ああ、そうかい。

ずいぶん男前の魚だな」

ソア「なにいつてるの。

頬にキズのある、強面^{こわもて}の魚ね」

鉄男「好きで付けたキズじゃない。

それもこれもロシア兵が悪いんだ。

あれからこっち、女性が寄り付かなくなっ

た」

ソア「それはかわいそうに。

でもその前からじゃないの、寄り付かない

のは」

鉄男「そこまで言うか」

鉄男苦笑い。

鉄男「まあいい。

あらかた吸い取ったから、リンカーン、ホ

イールを回してくれ」

ホイールが回転し始め、ちいさいコー

ヒーの球が床に落ちる。

鉄男、床掃除機のスイッチを入れ、
操作盤の水滴をタオルで拭う。

鉄男「さて、戻るとするか」

鉄男の姿が消える。

○マーズ53号操縦室（夜）

ソア、食後のお茶を飲んでいる。

モニターには、やはりお茶を飲んでい
る鉄男。

二人とも別のモニターで火星の夜の
ニュースを見ている。

鉄男「西キャナル市が建設開始らしいね」

ソア「東キャナルより西ってことね」

鉄男「やはりアマゾニス湖に沿ったところか」

ソア「そりゃあ、農業用水は大切だから」

ソア「もっともって人手が必要ね」

鉄男「でも、戦争に明け暮れる地球からは、

もう呼び込めないな。

悲しいことだ」

ソア「そうね、私たちで人を増やさなければ」

鉄男「そうだけど」

ソア「鉄ちゃんは確か独身よね」

鉄男「うん」

ソア「好きで独身してるの？」

鉄男「とんでもない。

結婚したいんだけど、相手がいない。

お昼の話の続きみたいだけど、やはり、この頬の傷が怖そうに見えるようだ」

ソア「話ししてみれば、そんなことないのにね」

鉄男「話すまで行かないんだ。

実は３年前、ある人の紹介で付き合ってた結婚寸前まで行ったことがある。

でも間際で断られた」

ソア「なんで？」

鉄男「私は食事の時に音を立てるそうなんだけど、それが気になるって断られた」

ソア「まあ」

鉄男「シヨックだったよ。

今までのんきに生きて来たけど、結構他人を不快にさせているんじゃないかって考え始めると、もう結婚なんか考えられなくなっただけ」

ソア「それは考え過ぎよ。

そんなの気にしない人を探すのよ」

鉄男「でももう41歳だから。

そういうソアちゃん、結婚してるの」

ソア「していたんだけど、離婚。

私は主にマーズ号に乗って、機体のメンテナンスをする仕事だから、一旦マーズ号に乗ると、3年近く火星に帰れない。

そりゃあ、夫が逃げるわねえ」

鉄男「二人とも悩みは尽きないなあ。

さあ、もう寝よう。

おやすみ、ソアちゃん」

ソア「おやすみ、鉄ちゃん」

そうして二人はそれぞれの寝室へ。

○マーズ54号操縦室（朝）

鉄男とソア、バーチャル・ゲームで

テニスを。

鉄男「なんかテニスの得点方法ってややこし

いね。

よくわかんない」

ソア「点数なんか気にしないで、毎朝30分

やれば、いい運動よ」

鉄男「そうだね、そうしよう」

しばらくプレイを続ける二人。

ソア「もういいわ、食事にしましょう」

ふたりはタオルで汗を拭い、テーブル

につく。

鉄男の食事は、玉子かけごはんと野菜

ソテー。

ソアはスクランブルエッグとグラノ

ーラ。

それぞれにコーヒー。

T 出発5か月後

○ マーズ53号操縦室（朝）

ソアが通信機にタッチしている。

モニターに危機管理官ローリンの姿。

ローリン「二人とも元気にいるか。」

と聞いても返事が来るのは15分後。

返事はともかく聞いていてくれ。

実は、月の住民の火星移住に変更がある。

火星移住は、火星協会が提案したんだが、

当初から問題視されていたのが、移住の意

思の確認なんだ。

火星協会は、一つの案としてこのプランを

発表したんだが、月の住民の中には移住を

望まない人々がいた。

例えば子供や妻や夫を地球に残してきた

人は、地球がどんなひどい状態でも、家族

のもとに帰りたい気持ちが強い。

また、年老いた両親が心配で、一人火星に

行くことはためられる人も。

さらに、地球にいる家族を、一緒に連れて

ゆきたいという人も現れて、ことはたいへ

ん複雑になってきた。

今、月と火星協会で話し合いが続いている。
だから、単純に月の人を火星にというプランは破棄される見込みだ。
どんな結論が出るかわからないが、しばらく待っていてくれ。
それから、これからは月基地と主に連絡してくれ。
それだと7分間隔で通信ができるから。
じゃあ、」

鉄男「えらいことだね。」

今地球にいる家族を月まで連れてくるには
乗り物が要る。

この53号か54号、あるいは2機とも地球に運ばないといけないのかなあ」

ソア「そうね」

鉄男「私たちの考えることではないけれど・・・。

それにしても、家族を地球に残したまま火星に行こうという人がいるとは、到底考えられない」

ソア「それは人それぞれよ。」

火星に行くことが生涯の夢だった人もいるはず」

鉄男「そういえば、君も旦那を残したまま

地球との往復3年間過ごした」

ソア「なによ、その言い方。」

まるで私を責めるような」

鉄男「あ、いや、そんなつもりでは・・・」

ソア「どんなつもりよ。」

私が一番気にしていたことを、よくも言ってくれたわね」

ソアはまなじりを上げて、通信機のス
イッチを切ってしまう。

あわてる鉄男。

鉄男「ああっ、待って！」

時遅く、モニターは暗転したまま。

鉄男、頭を抱えてしまう。

鉄男M「言わなきゃいいことを言ってしまった

た。

一言多いんだよなあ。

でも・・・、間違ったことを言った訳ではない。

ソアのほうが悪いんだ。

彼女、情が強いから。

そうだ、謝るのはソアのほうだ。

私は悪くない。

いいとも、連絡取らなくても平気だー

鉄男、コーヒークップをテーブルにたたきつける。

T それから3日後

○ マーズ54号操縦室（朝）

朝食を終えて、ぼんやりモニターをながめる鉄男。

鉄男 M 「そろそろ謝ってくればいいのに。

何してるんだろうー

さらに部屋を見回す。

鉄男 M 「なんかむなしいな。

やっぱりこちらから謝るか。

そう、それがいい。

ひとりぼっちには耐えられない」

鉄男、通信スイッチを押す。

マーズ53号操縦室の光景が現れる。

ソアはいない、

カメラを回転させて部屋を見回す。

いない。

鉄男「オリン、ソアはどこへ行ったんだ」

オリン「わかりません」。

人間の行動をずっと監視しているわけでは

ありませんので」

鉄男「そうか」。

あ、そうだ。

彼女が一番最後に見ていた仕事の予定表を

表示できるか？」

オリン「できます」。

これがそのデータです」

画面に表が現れる。

一番上に

(Bulkhead operation status)

鉄男「オリン、この英語を読み上げてくれ」

オリン「隔壁運用状況です」

鉄男「なんのことだ」

オリン「このマーズ号にセットされているすべての隔壁が正しく動作しているかを表示しています」

鉄男「〇は正常に動いているんだな」

オリン「そうです」

鉄男「このマイナス表示は」

オリン「何らかの問題がある隔壁の表示です」

鉄男「この報告はいつ？」

オリン「今朝5時です」

鉄男「ふーん。

じゃあ、Medical office Spoke Bulkhead というのは？」

オリン「医務室にある、着陸船への通路にある隔壁です」

鉄男「多分そこへ行ったんだな、彼女。

よし、今からそちらへ乗り移る」

鉄男、通信スイッチを切る。

鉄男 M 「はて、乗り移るとは言ったものの、

どうやって。

宇宙服を着るのは時間がかかりすぎるし、
フェリーボートの運転方法は知らないし、

船内宇宙服では心許こころもとないし・・・。

いや、やっぱり船内宇宙服だ」

隣のエアロックへ急ぐ。

○マーズ54号エアロック控室（朝）

鉄男「リンカーン、オリンと協同で、ホイールの回転を止めて。お互いのエアロックを向かい合わせにしてくれ。」

何分ぐらいかかる？」

リンカーン「30分ほどです」

鉄男、壁に掛かっている船内宇宙服を着る。

酸素呼吸を開始。

エアロックの緑のボタンを押してエアロック本体に入る。

○エアロック内部

入ると同時にボタンを押し、隔壁を閉じる。

ホイールの回転が止まって、体がフワッと浮き上がる。

エアロックの外への出口に泳ぎ着く。

そこには小さい窓が。

そこから覗くと、5 km先のマーズ

53号のエアロックが徐々にこちらに向きつつあることを確認。

鉄男 M

「たとえ100分の一秒でも、こんな

簡易宇宙服で真空中をテレポートしたこ

とはないが・・・」

鉄男、53号エアロックに意識を集中。

鉄男「よしっ」

鉄男の姿が消える。

○マーズ53号エアロック

鉄男、突然現れるとともに漂いだす。

鉄男「ああ、無事だった！」

鉄男、船内入口に急ぎ、緑のボタンを
押す。

○エアロック控室（朝）

エアロックから鉄男出てくる。

隔壁を閉じる。

急いで船内宇宙服を脱ぐ。

そして医務室にテレポート。

○マーズ53号医務室（朝）

現れる鉄男。

スポーク連絡通路の周辺にはツールボ
ックスやいろいろな道具が散らばっ
て浮かんでいる。

スポークのベルトドライブのステップ
に乗り、昇降ボタンを押す。

天井間隙でスイッチを切り、隔壁開閉
ボタンを押す。

ゴリゴリという音はするが、隔壁が開
かない。

今度は、レバーを押し下げて隔壁を開こうとするが、これもだめ。何度となくレバー操作を続ける。かすかに隙間が開くが、それ以上は開かない。

一旦下に降りた鉄男。

鉄男、空中の道具類の中から40cmほどのボールを見付ける。

再び昇降台に乗り、天井近くに止め、先ほど開いた隔壁の隙間にボールを差し込む。

力いっぱいボールを捻る。

開かない。

今度は、左手で開閉レバーを押しながら、右手でボールを捻る。

とたんに隔壁が異音を発しながら開き始める。

鉄男、ボールを投げ捨て、スポーク内へ手を伸ばす。

そこにはソアが倒れていた。

隔壁が開ききって、ソアの体がゆっくり落ちてくる。

鉄男、左手で昇降台の手すりを掴み、右手でソアの腋の下に手を差し込み体重を支え、3 m 下の床にテレポート。

鉄男「リンカーン、ホイールを回してくれ」

○マーズ53号ホイール・ルームD

鉄男、寝室1のドアを開いて、ソアの体を横たえる。

鉄男「ソア、ソアちゃん」

呼びかけるも返事がない。

頬に手を置いてみる。

鉄男「冷たい！」

おい、死んでるのか！」

首筋の脈を取って見る。

鉄男「お、生きてる！」

でも脈が細い」

鉄男、ソアの頬を叩いてみる。

反応はない。

鉄男「オリン、低体温症の対処法を教えてください」

オリン「はい。」

どうぞ」

壁のモニターに英語の箇条書きが現れる。

鉄男「オリン、この箇条書きを読み上げてくれ。」

だいたい意味はわかるが、命に係わることだから日本語で正確に知りたい」

オリン「わかりました。」

低体温症の対処方法。

低体温症に陥ると、半昏睡、瞳孔拡大、脈拍微弱などの症状が現れる。

これに対して

1・濡れた衣服を交換。

2・毛布などで体を温める。

3・アルコール・お茶・コーヒー以外の

暖かい飲み物を与える。

4・室温を温める度合いは、1時間に0・

5 度から 2 度で、急激な上昇は控える。
以上です」

鉄男「有難う」

早速、ソアの瞳孔を見てみると、大きく開いている。

ソアの着衣に触れてみる。

股間に大量の水分のシミが。

鉄男 M 「失禁したんだな。」

これは参った。

死ぬ手前までいったんだな。

脱がすか。

でも・・・。

ええい、仕方がない」

鉄男、隣の資材庫 D に向かう。

しばらくして、ショーツとスラックス

とバスタオルを持って現れる。

鉄男「オリン、この部屋の温度を 1 時間に 1

℃上げてくれ。

最高温度 28℃になるまで」

オリン「わかりました」

鉄男、手ぬぐいとショーツとスラックスを順番に傍に拡げて、かたく目をつぶる。

一本の短いタオルで自分の目隠しをする。

手探りでソアのスラックスを脱がし、さらにショーツも。

乾いたバスタオルで下半身を拭い、強く圧迫して尿を吸い取らせる。

そして新しいショーツとスラックスを穿かせる。

目隠しを取り、毛布を2枚重ねてソアに掛ける。

鉄男 M 「いや、こんなに冷たいのでは・・・。

どうしよう。

うーん、最後の手段だ。

でも。これって許されるのかなぁ」

鉄男戸惑いながら、衣服を脱いで、トランクス1枚になり、ソアの横に横たわる。

体を密着させてソアの体を温める。

鉄男 M 「横向きでは温めにくい」

鉄男、枕を2つ重ねる。

鉄男、ソアの体を持ちあげ、下向きにして、自分の体に密着させる。

ソアの顔を横に向ける。

さらにソアの両手を自分の腋の下に入れる。

ソアの両足を自分の足の間で挟み、布団を被る。

鉄男 M 「ひゃあ、冷たい！

でも我慢、我慢」

両手でソアの体を擦って体温を上げようとする。

T 3 時間後

鉄男 「オリン、室温は何度？」

オリン 「27℃です」

鉄男 「ありがとう。」

さて、ソアの体温は」

そつとソアの体の下から抜け出し、医務室へ。

戻ってきた鉄男の手には体温計。

鉄男、体温計の先をソアの口に。

瞬時に体温表示が現れる。

鉄男「35℃、もう少しだな」

鉄男ポロシャツを着る。

そしてソアに呼びかける。

鉄男「ソア、ソアちゃん」

まだ返事がない。

鉄男「参ったなあ」

鉄男、ソアをつま先に触れる。

鉄男「冷たい！

脚を温めなきゃあ」

鉄男、ソアの体を上向きにして、その足元に壁にもたれて足を投げ出して座り、毛布をかける。。

そして、冷たいソアの素足をトランクスの間に挟む。

鉄男「ヒャー、これも冷たい！」

と、そのときソアが目を開く。

ソア「ウウウッ」

鉄男「ムっ？」

ソア「ムムムムム」。

え、鉄ちゃん、なにしてるの」

鉄男「ああっ、意識が戻った！

ソア「ちゃん、大丈夫かい？」

ソア「鉄ちゃん、ほんとに何してるの？」

鉄男「君の足を温めてるのさ」

ソア「なんで？」

54号にいるはずのあなたがなぜ？」

鉄男「覚えていないのか？」

君は冷たいスポークの中で死にかかってい

たんだ」

呆然と虚空を見つめるソア。

ソア「そう、隔壁が・・・」。

どうして分かったの」

鉄男「3日も連絡がないから、この船のオリ

ンに確認したんだ。

彼もわからないといったんだが、直前に君が隔壁の検査をしていた事を知り、もしかしたらと」

ソア、茫然と考え込む。

ソア「そう、思い出した。

医務室のスポークの隔壁を見に行って、中に入ったら、隔壁が開かなくなって・・・」

鉄男「思い出したんだね。

よかった」

ソア「したら猛烈に寒くなって・・・」

鉄男「運がよかったんだ。

スポークの中は暖房していない。

着陸船とホイルの隔壁の開け閉めで、暖かい空気が入るだけだ。

私が君に謝ろうと思って通信回線を開いたのが午前7時。

マーズ53にレポートして、君を発見したのが8時過ぎ。

君がスポークに入っただが多分6時頃。もう2時間以上経過していたから、危なか

ったんだ」

ソア「そう．．．ああ、ほんとに有難う。
．．．でも、あなたなぜそこに？」

鉄男「変な想像しちゃあいけないよ。

君の足が冷たすぎたから、私の股間で温めていたんだ。

男の体の中で股間が一番暖かいんだ

失礼だとは思ったが、命には代えられない
んで．．．」

ソア「確かに暖かい」

鉄男「もう退_のけよう」

ソア「いえ、しばらくこのままで。

まだ寒いから」

鉄男「温まるまで、寝ていなさい」

T
（こうして1時間）

鉄男「ごめんね、3日前気に障ることを言っ

て」

ソア「いいえ、ここまで怒る必要はなかったの

に、私こそごめん」

突然大声で笑い始めるソア。

ソア「人が見たらなんというでしょうね。

あなたの股座またぐらに足をつっ込んで」

鉄男「ハハハハ、そうだね。

おかしいよね。

それよりもまず私は逮捕される。

許可も得ずに君の足を股間に」

こうしてしばらくの間大声で笑う二人。

鉄男「さあ、もう起きる」

ソア「そうね。

もう十分温まった。

ほんとに有難う」

鉄男寝室1から出てスラックスを穿く。

鉄男「ちよつと待っててね。

暖かい飲み物を持ってくるから。

鉄男資材庫Dからオレンジジュースを

持って来て。レンジで温める。

鉄男M「ああ、そうだ。

もしかしたら」

鉄男、レンジの下の棚を空けて、ウィスキーの瓶を見付ける。

鉄男 M 「やっぱり。」

ジョンはこんなところにまで酒をかくして。

やっぱりあの人はアル中だな。

人のことは言えないけど」

鉄男、ウィスキーのキャップを回してオレンジジュースに何滴か垂らす。
それをソアのところまで運ぶ。

鉄男「どうぞ」

ソア「ありがとう。」

至れり尽くせりね」

鉄男「君を怒らせたお詫びだ」

ソア、コップに口を付ける。

ソア「あ、ウィスキー」

鉄男「嫌いだったら、作り直してくる」

ソア「いいえ、大歓迎よ。」

もつとあるの？ ウィスキー」

鉄男「あるけど、今はだめだ。」

もう少し寝ていなさい」

と寝室の扉を閉めようとする。

ソア「開けといて、お願い」

鉄男「うん」

鉄男、テーブルまで歩いて、音を消し

火星のニュースの録画を見始める。

そばにあったウイスキーから1フィン

ガーをコップに注いで飲む。

そのうち疲れのため、突っ伏して寝て

しまう。

（夢の中）

○同じくマーズ53号ルームD

ソア「鉄ちゃん、起きなさい」

鉄男、うっすら目を開く。

部屋は薄暗い。

目をこらすと、ソアがテーブル越し

に座っている。

異様に青い顔色。

鉄男「えっ どうしたの」

ソア「鉄ちゃん、寒いよ」

そういつて鉄男の手に障る。

鉄男「おおっ 冷たい！

いったいどうしたんだ」

ソア、握った手を離さない。

ソア「鉄ちゃん」

鉄男「ちよつと、手を離して」

ソア「離さない、鉄ちゃん」

無理やり手を離す鉄男。

椅子から立って、寝室1をふと見る

と、そこにはソアが寝ている。

テーブルの方を振り返ると、もう一

人のソアが立ち上がり、鉄男に向かっ

てくる。

恐怖に襲われた鉄男は、エアロック

控室にテレポート。

○エアロック控室

急いで船内宇宙服を着る。

そのままエアロックへ。

○エアロック

小窓からマーズ54号を確認して、レポート。

しかし、距離が足りずに、鉄男は宇宙空間に。

○宇宙空間

宇宙服が急速に膨張してゆき、皮膚が凍って細かいひびがバリバリと広がる。

もう一度レポートして、やっと54号の操縦室に。

○マーズ54号操縦室

急いで宇宙服を脱ぎ、ふと鏡をみると、無残にひびに覆われた自分の顔。

鉄男「アッ！」

と、その時鉄男の肩に手を置く人物。振り向くと、蒼い顔のソアが、顔を

寄せてくる。

鉄男「やめてくれ！」

走り出す鉄男。

操縦室の寝室3に飛び込み、鍵をかける。

蒲団をかぶって、目を固く閉じる。

しかし、ふとんの中でなにやら蠢くも
のが。

ソア「鉄ちゃん」

ソアが抱きついて来る。

鉄男「やめてくれ！」

（夢、終わり）

○マーズ53号ホイルルームD

ソアが、椅子に座って眠っている鉄男の肩を叩く。

ソア「鉄ちゃん、起きなさい。」

鉄ちゃん

鉄男「ムウウウ・・・」

鉄男目を覚ます。

そしてソアを見付けて

鉄男「オアアアッ！」

半分夢の中の鉄男、恐怖に駆られて

椅子からずり落ちる。

ソア「どうしたの、そんな怖そうな顔して」

鉄男、周りを見回して。

鉄男「ここは？」

ソア「53号ルームDよ。」

あなたが私を運び込んでくれたんじゃない

い」

鉄男「えっ、そうか？」

夢か？

夢なのか？」

ソア「なんか怖い夢を見たのね。」

どんな夢を見たの？」

鉄男「そうか、夢か。」

ああ、夢でよかった！」

ソア「どんな夢だったの？」

鉄男「ああ・・・それは言えない」

ソア「どうして」

鉄男「多分君をまた怒らせてしまいそうで」

鉄男「おかしな人ね。」

怒らないから話さないよ」

鉄男「それより・・・。」

お腹が減った。

なんか食べよう。

今何時？」

ソア「午後1時過ぎ」

鉄男「お腹が減るわけだ」

と言いながら、隣の資材庫Dに歩き

始める。

鉄男「君、食事は？」

ソア「まだ」

鉄男「そう、じゃあなんか消化にいいものを
持ってくる」

しばらくして鉄男、食材を手に帰って
くる。

ソア「それなに？」

鉄男「おかゆとマグロ^ナフレーク」

鉄男、2つの深皿にラップをかけ、かゆのパックを開き、それに流しいれるさらにマグロフレークのパックを開いて、二つのお粥に入れて混ぜ、さらにほうれん草のお浸しを乗せレンジに。

温まったお粥をスプーンでかき混ぜる。

鉄男「さあ、どうぞ」

ソア「お粥ね。」

子供のころよく食べた。

フウウ、ああ熱いけど美味しい」

鉄男「ほんとだ、美味しいね」

二人は無言で食べ続ける。

食べ終えた二人、ホットレモンを飲む。

ソア「さあ、夢の話」

鉄男「もう忘れてたと思ったのに」

ソア「言いたくないと言われれば、聞きたくなるものよ」

鉄男「どうしても？」

ソア「どうしても」

鉄男「ふん、じゃあ・・・」

と話し始める。

画面は二人のホットレモンのコップを
いじる様子が。

鉄男「とまあそう言う訳なんだ。

怒った？」

ソア「怒るほどじゃないけど、なぜ私の悪
霊みたいなのがでてるの？」

鉄男「なぜって、夢にまともな理由なんか
ないよ。

まあ、しいて言えば、真空中を船内宇宙
服でレポートしたときの恐怖かな」

ソア「フーーン」

鉄男「怒らないの？」

ソア「というか、あなたの夢に私が出てきた
のが嬉しいの」

鉄男「それが悪霊でも？」

ソア「それだけ気にかけてくれているんだか
ら」

ちよつとドギマギする鉄男。

鉄男「えーと、あの、それは」

ソア「直しかけの隔壁の修理、手伝ってくれる？

あのままだと、万一のとき大変だから」

鉄男「そう、そうだね。

やろう」

立ち上がる二人。

○医務室のスポーク入口

スポークの昇降台に乗った鉄男。

ソア「そう、そのトーション・スプリング。

折れてるでしょ。

それが原因よ。

それを取り外して」

下から裸にされた隔壁を見上げて指

示するソア。

ソア「工具箱ボックスに同じものがあるから、
付け替えて」

鉄男、スプリングを取り出し、ネジで

かしめる。

そして隔壁カバーを取り付ける。

ソア「開閉ボタンを押してみて」

鉄男がボタンを押すと、スーッと隔壁は開く。

もう一度押すと閉じる。

ソア「完成！」

降りてくる鉄男。

ソア「ありがとう。」

これで一つ済んだわ」

鉄男「じゃあ、もうそろそろ帰るかな」

ソア「どこへ？」

鉄男「だからマーズ54号へ」

ソア「帰るの？」

鉄男「そりゃあ、それが私の任務だから」

ソア「そんなに急がなくてもいいじゃない」

鉄男「君も元の体に戻ったし」

ソア「まだ怖いからしばらく一緒に居て」

鉄男「そう、そうだな」

時計を見る鉄男。

鉄男「夕方7時。」

こんな時間にテレポートしたことはない。

危ないから、今日はここで泊まろう。

とりあえず操縦室へ。

月や火星から連絡が入っているかもしれ
ない」

二人、歩き始める。

ツールボックスは鉄男が持って。

○マーズ53号操縦室（夜）

帰ってきた二人。

ソア「なにか食べる？」

鉄男「ホット・ウイスキーにさやえんどう、

それから・・・おにぎり」

ソア「鉄ちゃん、おにぎり好きね」

鉄男「日本人の国民食なもの」

ソア「私も同じもの。」

準備するわね」

鉄男「ああ、私がやる」

ソア「いいのよ」

そういつて隣の資材庫へ。

○同・操縦室（夜）

ソア「久しぶりのウイスキーね」

鉄男「もう何か月ぶりかなあ。」

5 か月か。

ジョンにお礼を言わなくちゃ」

ソア「もう一杯」

鉄男「私も。」

これで終わりにしよう」

ソア、ホット・ウイスキーを2杯作る。

鉄男「もう寝よう。」

おやすみ」

と寝室ボックス2へ歩き始める。

ソア「鉄ちゃん、一緒に寝てくれる？」

まだ怖いから」

鉄男「うーん、そうだな。」

そうしよう」

二人は寝室ボックス1に並んで横たわる。

鉄男、遠慮して端の方に移動。

ソア、鉄男の傍ににじり寄る。

そして鉄男の胸に手を置いて

ソア「鉄ちゃん」

強く抱きしめる。

鉄男、体をソアの方に向けて、それに

応じる。

しばらく抱き合う二人。

そのうちソアが寝息を立て始める。

鉄男 M 「あら、寝ちゃった」

そうして鉄男も目を閉じる。

○ マーズ53号操縦室（朝）

テーブルでコーヒーをすする二人。

ソア「昨日の夜は暖かった。

ありがとう、鉄ちゃん」

鉄男「こちらこそ」

ソア「今夜からずっと一緒に寝ない？」

鉄男「それはそうしたいけど・・・」

でもマーズ54号の管理が・・・」

ソア「管理って、鉄ちゃんの場合、リンカー
ンの報告を待つだけでしょう？

そりゃあ、事故が起これたらすぐ対処しな
けりやいけないけど」

鉄男「きのう、船内宇宙服でここへテレポー
トしたのにかかった時間は約30分。

それでも30分で改善する事故って、ある
んじゃない？」

ソア「そりゃあそうだけど」

鉄男「やっぱり任務は大切だ。

火星に帰ったら、一緒に過ごせるから」

ソア「そうね」

鉄男「じゃあ」

○エアロック控室（夕方）

鉄男、船内宇宙服を纏う。

抱き合う二人。

鉄男、体を離し、ヘルメットを被る。

鉄男「じゃあ」

ソア「鉄ちゃん！」

鉄男、エアロックに消える。

○マーズ54号操縦室（夕方）

宇宙服を脱いだ鉄男が入ってくる。

すぐに通信回線を開く。

待ちかねたようにソアの姿がモニターに。

ソア「よかった！

無事だったのね」

鉄男「うん、大丈夫」

ソア「うん」

そこで突然別の通信回線が開く。

モニターに中年の女性の姿が。

クリシュナ（マリウス月面基地管理官 52）

「こちらマリウス月面基地、こちらマリウ

ス月面基地、マーズ号応答願います」

鉄男「あ、来た！」

ソア「こちらマーズ53号。

はじめまして。

メカニックのイ・ソアと申します」

1分ほどの間隔を置いて、

クリシュナ「ソアさん？」

早速応答有難うございます。

私は管理官のクリシュナです」

ソア「こちらから連絡しないといけないのに、遅れてすみません」

クリシュナ「長くお待たせしましたが、月からの火星移住者の概要が固まりましたのでお知らせします」

ソア「176人全員じゃないってことは聞いていましたか」

クリシュナ「地球に帰りたい人が102人。

そして71人が火星行きを希望しています。

その71人の家族の内28人がやはり火星

移住希望者です・

もうすでに102人は、ムーンライナー号で地球に帰ってしまいました。

帰りのムーンライナー号で地球から家族が月へ飛行してくる予定です。

あとはあなた方が月に到着するのを待つ

だけです」

ソア「そうですか。

あの、火星に行きたい方は71人とおっしゃいました、71人というのは……。数が合いませんが」

クリシュナ「ああ、それは月に残る人間が、私も含めて3人いるからです」

ソア「なぜ残るのですか」

クリシュナ「マーズ号2機に座標を送るためです。

マリウス電波天文台とチリのアルマ天文台と協同して行います。

これがないと正確な航行ができませんから」

ソア「ああ、……、そうですか。

それは……」

クリシュナ「気にしないでください。

これが私たちの使命ですから」

ソア「ほんとうに有難うございます。

こちらはあと40日足らずでそちらに到着します」

クシュナ「こちらに到着が2147年5月ごろ。

次の火星接近が2148年11月26日。
ですから火星への出発は2148年3月。
こちらへ着いてからほぼ10か月で出発
となります」

ソア「ということは地球からの移住者も、月
で1年ほど暮らしてもらわねばなりません。

マーズ号の食糧はギリギリ1年分ですから、
早くから搭乗してもらうことはできません。

火星までの飛行時間は約8か月」

クシュナ「そうですね。

こちらもそのつもりで計画を立てています」

ソア「たいへんですね」

クシュナ「こちらで餓死することを思えば、

1年なんてすぐです」

ソア「火星着陸船2機がそちらに曳航されて
いると聞いています」

クリシュナ「はい、月面から1万Kmに浮かべています」

ソア「わかりました」

クリシュナ「ではまた明日連絡します」

ソア「わかりました」

T 2147年7月

○ マーズ53号操縦室

ソア「おはようございます、クリシュナさん」

クリシュナ「おはようございます」

ソア「今日は、マーズ号に着陸船を装着します。」

丸2日かかると思います」

クリシュナ「はい。どうぞ気を付けて」

ソア「はい」

○ 月上空1万m

マーズ号2機と火星着陸船2機が浮か

ぶ宇宙。

まずマーズ53号の先端と後尾に2

体のロボットが張り付き、エアーを吹
かして姿勢制御。
マーズ号の着陸船格納スペースとの
位置決めが終わると、非常にゆっくり
と着陸船がその穴に。
最後尾が穴に入ると、その穴の周囲に
設置されたローラーが回転し始め、着
陸船を押し込んでゆき、底に達する
直前、ローラーの回転が止まる。
と同時に4本のステーが着陸船を固
定。

○マーズ53号ホイール操縦室

ソアが操作卓に寄りかかる。

マーズ54号との通信モニターには鉄
男の姿が。

ソア「鉄ちゃん、ここから本番よ。」

着陸船機能テストはほんとに大切だから手
伝ってね」

鉄男「OK！」

モニターに機能テスト工程が表示される。

鉄男「こんなにたくさんあるのか」

ソア「たくさんあるけど、ほとんどコンピュータ

ータが審査するから、私たちはその確認。

まず1番目。

固形燃料のチェック。

その項目をクリックして」

鉄男言われたとおりクリック、

ものの30秒程で緑のサインが出る。

ソア「燃料は、こちらもOK。

次は姿勢制御エンジン」

ほぼ同時に2人がクリックして、これ

も緑のサインが出る。

こうしてたくさんテストが続く。

T 2148年2月

○ マーズ53号ホイール操縦室

ソアと鉄男、モニターの前に。

ソア「昨日地球からの移住者がそちらに到着

したのですね」

クリシュナ「そうです。

到着したときは、泣いたり笑ったりと大騒ぎでした。

ところで、たいへんなことが起きました。

ロシアのドブゾロフが、宇宙攻撃艦ドブゾ

ロフ号を射ち上げました。

ドブゾロフ号は4日で月に到着します。

それには射程1万kmの自立型誘導ミサ

イルが2機搭載されています。

明らかに以前のマーズ号攻撃の報復と思

われます」

鉄男「危機管理官の岡田です。

初めました。

それは大変です。

移住希望者が搭乗完了次第、火星に出発します。

出発するには1か月早いんですが仕方ありません。

マーズ号に月の住人を明日から載せます」

クリシュナ「はい、わかりました。

いつ乗り組んでもいいように準備しております。

鉄男「皆さんにお伝えください。

荷物はなにも持ち込めません。

衣類も食料もありますから。

たしか天文学や、地質学の研究者が多いと聞いておりますが、その研究成果は手のひらサイズのメモリーに格納していただければ持ち込めます。

今日中に書き込みを終えていただきたいと思います」

クリシュナ「はい、それは完了しております」
鉄男「それはありがたい。

人員の運搬は、そちらのムーンライナー号でお願いします」

クリシュナ「総数99人を2回に分けて輸送します。

一組は月に呼び寄せた人と、呼び寄せられた家族のグループ58人。

もう一つのグループは残りの41人」

鉄男「人数に差がありますね」

クリシュナ「ええ。」

でもこれは仕方ないのです。

別れて暮らしていた家族をここでも引き離すに忍びないのです」

鉄男「ああ、そうか。」

そうですね、そのとおりです。

わかりました。

こちらのもそのつもりで準備します。

ホイルの部屋割りは、58人のグループ

は1室1人でグループ分けしておいて

ください。

41人のグループは8人ずつ。

ところでそちらのムーンライナー号のエア

ロックはどのような形状ですか」

クリシュナ「機体の先端がエアロックになっ

ています。

そちらのホイルのエアロックにドッキ

ングできます」

鉄男「たいへんよくわかりました。

それでは明日」

クリシュナ「はい」

T
翌朝

○月マリウス基地上空1万km（朝）

葉巻型の宇宙船ムーンライナー号が

マーズ53号に接近。

回転の止まったホイールのエアロック
に接近。

先端がホイールのエアロックに接触
し、両機がドッキング。

○ホイールエアロック（朝）

エアロックから、移住者が次々と泳ぎ
出てくる。

その一人がソアのそばに。

オチョア（33）「はじめまして。このグル
ープの責任者オチョアです」

ソア「マーズ53号責任者のイ・ソアです。
どうぞよろしく。

部屋の位置は以前お知らせしていますよね」

オチョア「はい」

ソア「ですから、ルームDとルームEの方は、
左の方へ進んでください。

A、B、Cの部屋の方は右へ」

オチョア「この重力は火星と同じでしたね」

ソア「そうです。

だから、月で6分の1の重力で暮らしてい
た皆さんには少し動きにくいと思います
が」

オチョア「ご心配なく。

月ではみんな地球と同じ重力にするため、
鉄の入った靴を履いていましたから」

ソア「ああ、そうなんですか。

それは知らなかった。

あの、移動が終わった時、あなたと、各部
屋の代表者の方は、この部屋の隣の操縦室
に集まってください。

これからの生活のルールを説明しますから」

オチョア「わかりました。

では部屋割りをチェックしてきます」

○マーズ号2機の浮かぶ月上空

ホイールはすでに回転し始めている。

マーズ53号のパラボラに初速を高めるためのタグボートが設置済み。

53号は発進。

○マーズ54号ホイール操縦室

操縦席には、54号搭乗者代表の、アイチャール・ブルーノ（39パイロット

ト）と鉄男が座っている。

鉄男「ドブゾロフの戦闘艦はあと9万kmで

月に到着しますよね」

ブルーノ「そうです。

彼らの持っているミサイルが射程1万Kmです。ですから、あと少しで射程に入ります。

鉄男「53号はタグボートです、20万k
m先まで進んでいますから安心ですが、こ
の54号は今から出発ですが、タグボート
はついていません。

ですから、普通にいけば最初の1日は2c
m、翌日は4cmと、たいへんのろいので
す。

そこで、私の超能力で、一瞬にして10万
kmの位置まで跳躍します」

ブルーノ「え？　今なんとおっしゃった？」

鉄男「テレポーターションです」

ブルーノ「嘘でしょう、まさか」

鉄男「信じられないのはよくわかります。

でも、本当なのです。

そこでブルーノさんから、艦内放送で、み
なさんに寝室にはいって、足を投げ出して
座って、壁のシートベルトを付けて戴くよ
う、案内してください。

御願います」

ブルーノ「はい、わかりました」

一時間後

鉄男「跳びます」

モニターに月が一瞬に小さくなるの
を見たブルーノは、驚く。

鉄男「あなたはパイロットでもあるのですね」

ブルーノ「ええ」

鉄男「このマーズ号を操縦してください。

私はフェリーボートに乗って、ドブゾロフ
の船をなんとかしてきます」

ブルーノ「なんとかって」

鉄男「たちまちはミサイルから逃れられたと
して、奴らは代りにマリウス基地を攻撃す
るでしょう。

それは絶対防がねばなりません」

ブルーノ「はあ」

鉄男「私の心配はいりませんから、船をしっ
かり守ってください」

ブルーノ「はい、わかりました」

鉄男「ところで、フェリーボートの操縦は、

「どうやるのですか？」

ブルーノ「あなたはおかしな人ですね。」

乗る間に操縦方法の質問」

鉄男「今思い出したのです。」

「そういえば、操縦の仕方を知らなかったと」

ブルーノ「（笑いながら）リンカーンに指示す

ればいいだけです」

鉄男「ああ、そうなんですか。」

「わかりました」

○フェリーのエアロック

鉄男、マーズ号の隔壁を開き、続いてフェリーの隔壁を開く。

○フェリー船内

宇宙服の鉄男は、その2枚の隔壁を閉じて、操縦席に座り、シートベルトを締める。

鉄男「リンカーン、フェリーの固定を解いてください」

リンカーン「はい」

4枚の固定器具から解放されたフェリーは、宇宙へ。

鉄男「正面の窓に、ドブゾロフの船の位置表示を頼みます」

長方形の大きい窓に、青い点と距離が表示される。

青い点は、窓の左上。

鉄男、窓の中心を青い点と重なるようにテレポート。

そして攻撃艦との距離が5000kmになるよう跳躍。

突然青い点が銀色に煌めく。

鉄男「さあ、どうだ、射程距離だぞ。」

撃ってこい」

敵の体からミサイルが一発発射される。

モニターに接近距離が目まぐるしく表示される。

そこで鉄男、モニターの上の方向へテ

レポート。
ミサイルは一瞬間を置いて、曲線を描いてフェリーに目標を変更。
距離200kmまで接近したとき、再びレポートして、遙か後方下の攻撃艦の真後ろに跳躍。
もちろんミサイルもそのあとを追って迫ってくる。
攻撃艦の真後ろ5kmに跳ぶ。
その瞬間2つ目のミサイルが発射される。
そのまた次の瞬間、最初のミサイルが攻撃艦に激突し、破壊する。
大きな爆発で窓の景色がかき消され、鉄男の目もくらんでしまう。
爆風でフェリーは地球方向に弾き飛ばされ、きりもみ状態に。
5分ほどして視力が回復。
きりもみで現在位置が把握できない。

鉄男「まずい！」

月はどこだ」

突然巨大な月が左から右へ通り過ぎる。

鉄男「月だ！」

鉄男、月を追いかける。

やっとのことできりもみを抑え込む。

鉄男「いったいミサイルはどこだ」

懸命にミサイルの炎を捜す。

鉄男「リンカーン、火星の公転軌道面をスクリーンに表示してくれ」

しばらくして、薄赤い巨大な円盤が観

測窓の斜め方向に表示される。

鉄男「この面のどこかにミサイルがいる。

マーズ54号の位置を点で表示してくれ」

20分ほど経過してから、観測窓のス

クリーンの右端に、赤い点が表示され

る。

そしてその点を追うように炎の点が。

鉄男「見つけたぞ」

鉄男、目を細めて、そのミサイル目掛けてレポート。

○マーズ54号から600kmの空間

フェリーはミサイルの後方400km
に迫っている。

鉄男「ミサイルの炎が消えた。

慣性飛行だな」

鉄男、ミサイルの前方にテレポート。

鉄男「リンカーン、ミサイルの前を横切るよ
うにフェリーを飛行させてくれ」

そしてミサイルの軌道を確認。

鉄男「え？

この船を追ってこない？

なぜだ」

もうしばらく様子を見るが、変化なし。

鉄男「リンカーン、なぜミサイルは近くにい
るこの船を追ってこないんだ」

リンカーン「最終射程距離に近づくと、追尾

システムが解除されるようです」

鉄男「それは困った。

どうしよう」

そう言っている間にも、ミサイルは5
4号に接近。

鉄男「しかたがない、最後の手段だ」

鉄男、フェリーをミサイルの前方にテ
レポートさせる。

そして方向を転じてミサイルの正面
へ。

そして静かな時間が過ぎる。

鉄男の脳裏には、姉の紗枝や母やソア
の面影が浮かぶ。

鉄男「母さん、お姉ちゃん！」

フェリーに急速に近づくミサイル。

そして衝突の一瞬前、鉄男は宇宙空間
へテレポート。

○宇宙空間

やはり爆発の衝撃で弾き飛ばされる。

クルクル回転しながら遠ざかる宇宙
服の鉄男。

○マーズ54号から8000kmの宇宙

鉄男、宇宙服の中で目覚める。

鉄男「む？

まだ生きてるのか。

ここは？」

体をねじって反対方向を見ると、ミサ

イルとフェリーの残骸がまだ赤く熱

せられているのが見て取れる。

鉄男「54号は？」

宇宙服の回転を止めて見回すと、

54号の機影が。

鉄男「ああ、よかった。

無事でいてくれた！」

鉄男、最後の力を振り絞ってテレポー

ト。

○マーズ54号傍の宇宙空間

鉄男、現れる。

ゆっくり通り過ぎる54号。

鉄男「そんなに速度が上がってなくてよかつ

た」

鉄男、ホイールのエアロックに近づく。

鉄男「え？ ホイールの回転が止まっている」

さらに太陽光パネルが吹き飛んでい
るのを見付ける。

鉄男「ええ？

ミサイルの残骸のせいかな？」

鉄男、エアロックへレポート。

○ 5 4 号ホイール・エアロック

船内に現れた鉄男。

照明が非常灯以外すべて消えている。

宇宙服のヘッドライトを頼りに、泳い

で出口の隔壁へ。

開閉ボタンを押すが開かない。

鉄男「ああ、そうか。

太陽光パネルはもう無いんだ」

言いながら、レバーで隔壁を開く。

○ エアロック控室

鉄男、エアロックを閉じて、宇宙服を脱ぐ。

○54号ホイル操縦室

隔壁が開き、鉄男が泳ぎ入ってくる。

操縦席のブルーノ驚く。

ブルーノ「岡田さん！」

無事でしたか！」

鉄男「ええ、なんとか。

太陽光パネルが吹き飛んでいますが大丈

夫ですか？」

ブルーノ「大丈夫じゃないです。

コンピュータと通信機器とトイレ、それ

から天井に備蓄している大量の水の保温

は非常用バッテリーで動いていますが、あ

とは駄目です。

ホイルも止まりました」

鉄男「それは大変だ」

ブルーノ「暖房が切れて1時間、だんだん寒

くなっています」

鉄男「ソアちゃんに相談しよう」

マーズ53号への通信スイッチを入れる。

鉄男「ソアちゃん、鉄男です。」

聞こえますか？」

しばらくしてモニターにソアの姿が。

ソア「鉄ちゃん、無事ですか？」

ドブゾロフ攻撃艦を迎え撃ったと聞いています。」

鉄男「なんとか、かたづけましたが、その残骸が、太陽光パネルに激突して、電源が失われました。」

なんとかならないですか？」

ソア「太陽光パネルの代りはありません。」

どうしましょう。

あ、ちよっと待ってくださいね」

モニターに。横のキーボードを叩く姿。

ソア「有りました。」

緊急用の発電機！」

鉄男「どこに！」

ソア「プラスマイームを受けるパラボラ
の中心部に、直径20cmの導管があり、
いつもはカバーが掛かってますが、指令で
開くことができます。」

その導管は、パラボラとホイールの間の軀
体の間に設置されている小さなタービン
に続いています。

プラスマイオンの5%を取り込んでター
ビンを回転させ発電します。

これは今まで一度も使われたことがあり
ません。

非常用ですから。

本当のところ、動くかどうか分かりませ
ん。

こんなの使い物になるのでしょうか？」

鉄男「メカニックのソアちゃんが分からない
ものは、私にもわからない。

でも試してみても損はない」

ソア「発電能力は、太陽光パネルの70%だ
そうです」

鉄男「70%でも、ゼロよりましだ。

「どうやるの？」

ソア「リンカーンに命じさえすれば」

鉄男「なるほど。」

ブルーノ「やってみてください」

ブルーノ「はい。」

リンカーン「非常用発電タービンは駆動で
きますか？」

リンカーン「できます。」

ただ運用に3日ほどかかります」

ブルーノ「それでもいい。やってみてくれ」

モニターにタービンからの送電回路が
表示される。

導管から、プラズマビームが取り込ま
れる状態が点線で表示される。

○マーズ54号操縦室（翌日）

ブルーノがマイクで語り掛ける。

ブルーノ「54号ご搭乗のみなさん、先日報
告しましたロシアの攻撃艦はなんとか撃

破しました。

その過程でミサイルとこちらのフェリーボートが衝突し、その残骸がこちらの太陽光パネルにぶつかり、電気系統がほとんど使えなくなりました。

トイレの吸引器は使えますが、シャワーの温水は使えません。

ホイルの回転も止まりました。

室温もだんだん下がっていますから、ここ3日程は、寝室の布団に潜り込んで体温保持に専念してください。

寝たきりも危険なので、ときどき外へ出て体を動かしてください。

食品も温められないので、クラッカーや乾パンや缶詰、レトルト食品を召し上がってください。

テレビも映りません。

3日すれば、タービン発電機で元に戻ります。

それまでお互い、頑張らしましょう」

○マーズ54号ルームB

資材庫Aから鉄男が泳ぎ出てくる。
手でレバーを落とし隔壁を閉じる。
部屋はまだ停電状態で、非常灯1個が
点灯しているだけ。
6つつある寝室の内、下3番目の寝室
から美しい女性の日本語の歌が聞こ
えてくる。

「ふけゆく秋の夜 旅の空の
わびしき思いに ひとり悩む
恋しや故郷 なつかし父母
夢路にたどるは 里の家路」

鉄男、浮遊を止める。
次第に涙が湧き出てくる。
曲が終わると、寝室から拍手が。
部屋をノックする鉄男。
戸が開いて、若い女性が現れる。

泣いている鉄男を見て驚く女性。

来^{くる}栖^すさくら（28）「え？

どうなさったんですか？」

鉄男、涙を拭って、

鉄男「あなた方の歌でしたか。

いや、あまりに美しい歌声で、泣いてしまいました。

ありがとうございます、いい歌を聴かせてもらって。

私は火星から来た岡田鉄男と申します」

さくら「まあ！」

というなり、寝室から出て鉄男に抱き着くさくら。

驚く鉄男。

鉄男「ど、どうなさったんですか」

さくら「おじいさん！」

鉄男「おじいさん？」

さくら「そう、おじいさん！」

鉄男、さくらの腕を振りほどこいて

鉄男「何をおっしゃっているんですか」

さくら「ああ、間違いました、叔父さん！」

鉄男「それもおかしい」

さくら「おかしくないです」

あなた、岡田鉄男さんですね」

鉄男「そうですけど」

さくら「あなたは2048年に火星に出発な

さいましたね」

鉄男「ええ、まあ、そうですけど」

さくら「あなた、岡田紗枝という人ご存じで

しょう？」

鉄男「えっ？」

さくら「どうなんですか」

鉄男「ええ、知ってますけど・・・」

さくら「私はその方の4代目の孫です」

鉄男「孫！

そんなばかな！」

さくら「来栖さくらと申します」

鉄男「ええ？」

いや、なんというか・・・。

本当ですか？」

さくら「本当です。」

こんな込み入った嘘をつくはずが無いでしょう？」

鉄男「そりゃあそうですけど」

さくら「寒いから、こちらに入ってください」

と、寝室に招じ入れ、戸を閉める。

さくら、部屋の他の2人に

さくら「あなたたち、岡田鉄男さんが見つかりました。」

この方がそうです」

途端に一人の女性が抱き着いて来る。

来栖あやめ（25）「おじいさん！」

鉄男、たじたじとなり、あやめの手を振りほどく。

さくら「この子は私の妹のあやめです」

そして、残りの一人を指して

さくら「この方は」AXAの川田幸子（33）

さんです。

私たち姉妹の保護のため、火星まで同行してくれました」

川田「初めまして。」

川田と申します。

J A X A 理事長の秘書です」

鉄男「J A X A ！」

川田「J A X A ではあなたの存在はずっと機密扱いになっています。

このことが外部に漏れるのを防ぐため、理事長と、秘書1名しかあなたのことは知りません。

これを構築なさったのが、あなたに初めて会った福井さんで、彼は、火星であなたが行方不明になったときから、あなたのお母さんの係累をずっと監視し続けて、福井さん亡きあと、歴代理事長がそれを引き継いでいます」

鉄男「ええっ？

なんのために？」

川田「超能力者は、世間に知れると、危険な目に合います。

それを避けるためです」

鉄男「私の子孫にテレポートできる人はいた

んですか？」

川田「はい、一人だけ。」

それがこのさくらさんです」

鉄男、あんぐり口を空けて

鉄男「いやあ！」

山田「ある大雨の日、川が決壊して一人の女性
性が、流される自宅の屋根に取り残された
のです。」

それを傍で見ていたさくらさんが矢も楯
もたまらずテレポートして、こちらの岸に
助け上げたのです。

ところがその光景をテレビカメラが撮影し
て、そのままその場を離れたさくらさんを
つけて実家の場所を探り当て、報道したの
です。

それからさくらさんはあやしい男たちにつ
き纏われるようになったのです。

日頃連絡を絶やさぬようにしていたJAX
A理事長はすぐやってきて、（あなたの叔
父さんの住む火星に行きませんか）と誘っ

たのです

。一家で相談の末、娘二人を火星に送ることを決めたのです」

聞いている鉄男、言葉も出ない。

山田「これでお分かりになりましたか？」

鉄男「どうして私が火星で生きていると」

山田「東キャナル市長からJAXAに問い合わせがあって、それでJAXAもわかったのです」

鉄男「ふうーん。

不思議な話もあるものですね」

さくら「だからやっぱり叔父さんなんですよ」

あやめ「そうよ」

鉄男「そうなの。

わかった、納得しました・

だけど、火星でもレポーターシヨンのことは、黙っていてください。

みんないい人たちですけど、やはり万一の場合、命がけをお願いされるかも。

それはなんとしても避けたい。

あなたは女性だから、結婚すれば子供も生まれるかも。

そうだったら、その子供を残して、命がけの任務には行って欲しくない。

わかりましたか？」

うなずく3人。

○ 同・翌朝

ブルーノ、新しくクルーに加わったさくらとあやめにマイクを渡す。

さくら「わたしたちなんかがアナウンスしていいのでしょうか？」

鉄男「あなた方の声はたいへん美しい。

私やブルーノのしゃがれ声よりも、はるかにみんなの心を和ませる。

あなたたちじゃなきゃいけないです」

ブルーノ「言葉に詰まったら、このノブでクラシックの音楽を大きくすれば、自然に語り

続けます」

鉄男「そして姉妹で美しい歌を時々交えて

もらいたいです」

さくら「わかりました。

やってみます。

ね、あやめちゃん」

あやめ「うん」

そうしてスイッチをONにして、音楽を背景に話し出す。

目の前に鉄男の描いた日本語原稿。

二人の喉には自動翻訳器。

さくら「みなさんお早うございます。

私は来栖さくらと申します」

あやめ「私は妹のあやめといいます」

さくら「今日から船内放送のアナウンサーを任されました。

こんなことは初めてですので、ご満足いただけるかどうか分かりません。

ですが一生懸命頑張ります。

どうぞよろしく」

あやめ「最初に、あと1日で電力がほぼ復旧します。

復旧とは言っても、もとの70%ほどです
ので、みなさんに節電をお願いします」
さくら「暖房は元通りになりますので、ぜひ
寝室から出て、体を動かしてください。
なお、部屋から部屋への移動は、隣の資材
庫へは自由ですが、そのほかの部屋への移
動は、操縦室のブルーノさんの許可を取っ
てください。
あまりに1つの部屋に人数が集中すると
ホイルの回転にむらが出ますから
部屋から部屋へ移動する時、必ずレバーで
隔壁を閉めてください。
危険ですから。
朝のお知らせは以上です。
では、私たち姉妹の歌を聞いてください」
そうして「エーデルワイス」を歌いだ
す。

Edelweiss, Edelweiss

Every morning you greet me

Small and white

Clean and bright

You look happy to meet me

Blossom of snow may bloom and grow

Bloom and grow forever

Edelweiss Edelweiss

Bless my homeland forever

途中からマーズ53号のソアも歌いだす。

傍で聞いていた鉄男、またも涙が。

T 3 か月後

○ マーズ54号操縦室

ブルーノ「こんにちはみなさん。

きょうは火星姉妹のさくらさんとあやめさ

んからの提案の演エンタテインメント・フェア芸大会の初日です」

さくら「まず最初にマーズ53号からの、

キンメル(44)さんの、パントマイムで

す。

どうぞ」

53号のルームからのビデオ中継が

始まる。

操縦室の大きいモニターに中年の男性のパンツマイムがはじまる。

上着を脱ごうとするが、片腕が引っかかって、うまく脱げない。

癩癧をおこして片袖に両腕を差し込んで、身動き取れなくなってしまう。

そして上着の裾をまくって無理やり脱ごうとすると、それが頭にかぶさって倒れてしまう。

軽妙な動作に操縦室のブルーノ、鉄男、さくら、あやめ、幸子が笑い転げる。

すべての隔壁を解放してあるので、あっちこっちから笑いの渦が。

なんとか上着を脱いだキンメル、お辞儀をして退場。

あやめ「つぎは54号のブラウリー夫妻のタンゴです」

タンゴの曲とともに若いカップルが自作の衣装でタンゴを踊り始める。

音楽は、重力を考慮してゆっくり再生。

踊りもスローに。

ブルーノ「こりゃあプロ級だね。

うまいなあ」

幸子「私たちも踊りましょうよ」

ブルーノ「ええ？」

僕は踊れないよ」

幸子「私がリードするから」

と無理やり立たせて手を組ませる。

ブルーノ「どうやるの」

幸子「ほら、モニターのまねをして、右足

左足、右足、ここで振り返って」

ブルーノ「え？」

幸子「左足を大きく伸ばして」

ブルーノ「左って、どっちだっけ」

幸子「ほら、足元を見ないの。

私の目を見て」

ブルーノ「そんな！」

とたんにブルーノこけてしまう。

一同大笑い。

幸子「鉄男さん、あなた踊る？」

鉄男「いや、勘弁してください。」

ブルーノを使ってください。

彼の方がうまい」

と言っているうちに、モニターの二人は踊り終える。

各部屋から拍手の嵐。

ブルーノ「ああ、えらいめに合った」

あやめ「次はブルーノさんと岡田さんのコントです。」

題は（荒野のガンマン）。

さあ、どうぞ」

二人はダンボールでつくった拳銃を手に並ぶ。

鉄男「俺はガンマンのワイアット・アンプ」

ブルーノ「俺も同じくドク・マンディ」

鉄男「おい、どうして俺のジュースを飲んだ」

ブルーノ「え？ 飲んでないよ」

鉄男「飲んだだろう。」

俺が横を向いているときに飲んだだろう」

ブルーノ「それは言いがかりだ」

鉄男「いや、飲んだ。」

俺のこの目が見ている」

と、左目の横に貼っているバンドエイドをめくると、フェルトペンで書いた目が。

ブルーノ「そんなばかな。」

そんな目で見えるはずがない」

鉄男「そこまで言うならしかたがない。

決闘だ」

ブルーノ「いいとも。」

じゃ、ここから5歩歩いて銃を撃つ。

いいな」

鉄男「いいとも」

ブルーノ、左へ拳銃を上へ捧げながら歩いてゆく

すると、鉄男はその後ろを歩いてゆく。

ブルーノ「1、2、3、4、5」

そして振り向くとすぐそばに鉄男。

部屋の人たちから笑いが。

ブルーノ「おい、なんでついて来る。

お前は向こうに5歩だぞ」

鉄男「え？　そうなの？」

ブルーノ「当たり前だろ」

鉄男「そうなんだ」

ブルーノ「やり直しだ」

二人はもとの所へ。

ブルーノ「背中合わせに歩くんだぞ」

鉄男「わかった」

ブルーノ「じゃ、1、2」

鉄男振り向いて

鉄男「5で撃つんだな？」

ブルーノ「そうだ。

ええい、もう一度初めから」

再び背中合わせに。

ブルーノ「1、2、3」

鉄男振り向いて。

鉄男「おい、お前、先に撃つつもりか？」

ブルーノ「当たり前だろ。

それが決闘だ」

鉄雄「そうなの」

ブルーノ「そうだよ。」

もういい加減にしてくれよ。

じゃ最初から。

1、2、3」

鉄男「あの、4で撃ってもいいか？」

ブルーノ「もうイライラする！」

そんなのだめに決まってるだろ。

仕方ない、最初から。

1、2、3、．．．いつまで続くんだ」

鉄男「ごめん、こんどはちゃんとやるから」

ブルーノ「ほんとだな、ほんとにほんとだな」

鉄男「うん」

ブルーノ「じゃもう一回。」

1、2、3、4、5」

二人は振り向きざま、口で（バアン）

といって銃を発射するつもり。

ブルーノ「アアア．．．」

と悲鳴を上げて倒れ、苦しみの表情。。

鉄男、銃を覗き込み

鉄男「ああっ ごめん。

弾^{たま}を入れるの忘れてた」

大爆笑。

ブルーノ、起き上がって

ブルーノ「もうなんだよ！

いい加減にしてくれ」

と、二人はカメラに向かってお辞儀。

あやめ「ご苦勞様でした。

あの二人、あれが地なんですかね。

またやってもらいましょう」

T 火星到着前日（夜）

○ マーズ号2機の浮かぶ火星上空3万km

○ マーズ54号操縦室

ブルーノ「火星までの8か月、長かったな」

幸子「私はあなたと一緒にでちっとも長いと感じ
なかったわ。

もう3か月滞在してもいい」

ブルーノ「いや、やっぱり早く火星に着いて

思い切り風呂に入りたいよ」

鉄男「それはそうだな。

この宇宙船のどの部屋も、汗のにおいがする」

さくら「ほんとに火星で風呂にはいれるの？

叔父さん？」

鉄男「もちろんだとも。

さて、もうそろそろ考えないといけないかな。

火星での君たちの仕事」

さくら「もう東キャナルの人事課のカナルさんと話し合って、学校の先生になることになったわ」

鉄男「そうか。

あやめちゃんは？」

あやめ「私は市議会の書記」

鉄男「書記？

どんな仕事をするの？」

あやめ「議事録の記録と、法案の準備」

鉄男「法案？

君はどんな勉強してきたの？」

あやめ「前に言ったでしょう、叔父さん。

大学の法科よ」

鉄男「わあ、そうなんだ。

君はすごいんだ」

あやめ「はい、そうです。

それより、着陸の準備をしてしまいましたよ
う」

鉄男「準備ったって、コンピューターのデー
タの吸い上げだけだ」

幸子「それはもう昨日終わってます。

だから今夜はマーズ号との、たのしいお別
れ会」

ブルーノ「はあ、君はしっかりしてるね」

幸子「あなたが選んだ私だもの。

もうこの姉妹の保護任務も終わりだし」

あやめ「幸子さん、ほんとに有難うございま
した。

幸子さん、ほんとにはあなたは火星に来たく
なかったんじゃない？」

幸子「いいえ、JAXAの職員は全員、チャ

ンスさえあれば、宇宙旅行したいって思っているのよ。

お二人と一緒に楽しかったわ」

さくら「私たちも」

○火星上空500km

まずマーズ53号着陸船がホイールから解き放たれ、火星に向かう。

しばらくして54号も離脱。

2機は間隔を置いて火星の大気圏へ。

○東キャナル宇宙空港

まず53号が着陸。

ワイヤー状のエレベーターで、月から移住者が降りてくる。

そのあと、3kmの間隔を置いて54号も着陸。

出迎えた市長たち。

その中には、ジェシー一家、ジョンたち近しい人々も。

最後に降りた鉄男をその人たちがと
り囲む。

ジョンがハグしてにこやかに。

ジョン「無事でよかったなあ」

鉄男「はい、なんとか。

ジョン、あなたも体は大丈夫ですか」

ジョン「もちろん」

キャリー「テッツオ！」

抱き着くキャリー。

鉄男、キャリーを持ちあげようとして

よろめく。

鉄男「おおい、重くなったなあ」

キャリー「ありがとう、

火星じゃ、ふっくらしてるのが美人の条件

よ」

鉄男「そうか、それはよかった」

続いてステフがハグする。

昔を思い出して複雑な表情の鉄男。

ジェシー・ダグラス（42ステフの夫）

「お帰り。

無事でよかった」

鉄男「うん、ありがとう」

ステフ「そのお嬢さんたちは？」

鉄男「ああ、彼女たちね。」

私の孫」

ステフ「なに言ってるの。」

意味がわからない」

鉄男「私の姉の4代あとの子孫だ。」

これからよろしく頼む」

ステフ「へえ、こんなことってあるんだ」

さくら「来栖さくらと申します」

あやめ「来栖あやめと申します」

幸子「JAXAの山田です」

ブルーノ「月から来ましたブルーノです」

4人そろって頭を下げる。

と、そのとき市長が寄ってくる。

シングルトン「岡田さん、ご苦労様。」

早速だけど、あさって相談があるの」

鉄男「はい、わかりました」

シングルトン「9時にね。」

今日はゆっくりして頂戴」

鉄男「有難うございます」

忙しそうにその場を離れる市長。

ジェシー「君の歓迎会がある。今からセントラル・ホテルへ行こう」

そのとき杉田夫妻がやってくる。

杉田龍之介（79 小太刀の名手）「よう、よく無事で戻ってきたのう」

杉田静^{しず}（78 龍之介の妻）「ほんとに」

鉄男「殿、奥様、お元気でしたか」

静「あなたにお礼を言わなくちゃ。

あなたがロシア兵を下してから、弟子入りが増えちゃって、たいへん。

この人、毎日張り切って」

鉄男「それは重畳にござりまする、殿」

龍之介「なに、腹ごなしにはちようど良い」

鉄男、笑って龍之介の手を取る。

ジェシー「先生も歓迎会へどうぞ」

静「いや、もう・・・」

鉄男「そんなことおっしゃらずに」

と、二人の手を取り、歩み始める

鉄男「それじゃ幸子さんとブルーノも。」

君たちなんか予定でも？」

ブルーノ「いや、なにも」

鉄男「じゃ、一緒に。」

それから、ソアちゃんはどこだ？」

と言ってる間に、人込みをわけてソアが近づく。

抱き合う二人。

ステフ、目を丸くする。

○東キャナル市庁舎（外観）

○危機管理室

椅子に鉄男が座っている。

そこへ次の人たちが入ってくる。

ライアン・ホール、メラニー・シング

ルトン、クリスティン・コートニー、

アルメンダリス、ゴードン・ローリン。

市長「岡田さん、こんなに早くから待っていてくれたの」

鉄男「とんでもない。

なにかたいへんなことでもあったんです

か・」

市長「そうなの。

ローリン、説明して」

ローリン「はい。

実は、5か月ほど前、大変な知らせが

欧州火星協会から入ってきたんだ。

それは、アメリカとイスラエルが火星に

都市を作るので、協力してほしいと言って

きたんだ。

火星協会は、ますます暴力的になってきた

両国の申し出でをただちに拒絶したんだ。

何度かの激しい応酬の末、アメリカは、国

内の、火星協会の施設、財源、人員を凍結

したんだ」

鉄男「いかにもアメリカのやりそうなことで
すね」

ローリン「そうして協会のすべての情報を手に入れ、東キヤナル市を乗っ取る計画を始めたんだ」

鉄男「アメリカの力を持っていたら、協会の助けなど必要ないと思いますけど」

ローリン「それがそうでなくなってきたんだ。アメリカの主要産業は実は農業で、コントロールなき地下水のくみ上げで、水脈が枯渇し始め、農民生産はがた落ち。輸出するどころではなくなってきた。

また、世界的紛争の増加で、各国の財源が細り、儲け頭だった武器・弾薬・航空機を買える国が減ってきた。

そこへ持ってきて、金を右から左へ動かすだけで巨万の富を築いてきた金融資本も、その金が市場の平和と信頼の上に築かれてきたことをないがしろにして、衰退し始めていている。

このまま何年国を維持できるか」

鉄男「イスラエルがこれに加わったのは？」

アルメンダリス「それは私から説明しよう。

イスラエルは、建国以来、アラブ世界と戦いを続けてきた。

何百万のパレスチナ人を殺傷しても懲りずに戦い続けてきた。

それはアメリカのユダヤ資本のおかげでもあるんだが、そのアメリカ自体が弱体化して、武器なども援助できなくなりつつある。

このままいくと、いつか地中海に追いやられかねない。

そこでユダヤ人が静かに暮らせる火星に目を付けたんだ」

鉄男「なるほど、わかりました。

それで・・・」

ローリン「両国は、1か月で火星に到着できるロケットエンジンを開発し、それを30人乗りの宇宙船に取り付けて、再来年も火星に出発する準備を始めている。すべて世界中のユダヤ資本の金でだ」

鉄男「そうすると、この後どうなるんですか」

市長「あなたが月から帰ってくる間に、市議会
会で4か月もの間検討会があった。

まだ結論が出ていないの」

鉄男「たしかだいぶ前に、月協定というのが
国連で採択されましたよね。

月を始めすべての天体で、国の領土宣言は
無効だという条約」

市長「良く知ってるわね。

でも、主要国はすべて批准していません。
もちろん、アメリカもイスラエルも」

鉄男「ということは、彼らの言うままになる
ということですか」

市長「この火星で血が流れることだけは避け
たい。

でも、このままいくと、300人のアメリカ
兵、イスラエル兵が乗り込んでくること
になる。

血を見ずには済まない。
さらに、我々には武器がない。

これをどうしたら・・・。

頭が痛いわ」

鉄男「彼らが火星に上陸する前に食い止めな

いと、市民の犠牲が出る」

アルメンダリス「そうだ。

私も君の意見に賛成する。

しかし、どうやって宇宙空間で彼らを撃破

したらいいのか」

鉄男「あの・・・、

今思いついたんですが、私たちは月を出発

してすぐ、ロシアのミサイルに襲われまし

た。

そのとき私は、マーズ54号のフェリーボ

ートをロシアのミサイルにぶつけて破壊

しました。

我々にミサイルは無くても、地球からの貨

物船が確か150機程残っていたと思ひ

ますが、それを彼らの宇宙船にぶつけたら、

たとえ爆薬はなくても、船を破壊できるの

では」

ローリン「私たちは、着陸後の彼らをどうやって防ぐかばかり考えていましたが。

そうですね、宇宙で破壊するのが一番です」

アルメンダリス「地球からの進路に横一列に

黄道^{こうどう}上に貨物機を並べ、近づいてきたら、

発進させて宇宙船に当てれば」

ホール「しかし、敵は誘導ミサイルでそれを破壊できるでしょう？」

ローリン「たとえば50機もの貨物船をすべて打ち落とすだけのミサイルは搭載できないでしょう。

地上の戦闘機の機銃掃射なら、当てることはできるでしょうが、そんなものでは貨物船は破壊できません」

市長「実戦済みの岡田さんの意見は貴重でしたね。

この案でもう一度市議会に斯けましょう」

鉄男「何も知らずに宇宙船に乗り込む兵たちは気の毒ですが、しかたありません」

市長「じゃあ、そういうことで、今日の議事

は完了。

岡田さん、月からの飛行の疲れも残っているでしょうに、有難うございました」

鉄男「貨物船を打ち上げるときには、お手伝いします。

私のほんとの仕事、旋盤や金属加工の腕が役立つかも知れません」

市長「はい、そのときは」

T 2148年

○東キャナル宇宙空港

36機の火星着陸船が、そばに2機づつ貨物船を装着して整然と並んでいる。

燃料の水素を注入する作業が進んでいる。

○空港管制室

市長、ローリン、ホール、アルメンダリス、そして鉄男がその作業を観察している。

ローリン「明日から、毎日10機づつ打ち上げだけど、なにか見落としは無いだろうか」

市長「もう何十回もロールプレイを繰り返して、問題は出尽くしたわ」

ホール「そうだよ」

もう夢に出てくるほど取りつかれたよ。

これから先は運しだいだな」

鉄男「貨物船9機づつ、黄道面こうどうの上下、

左右から間隔を置いて、敵の船が火星にあ

と20万kmの位置で、一斉に襲い掛かる。

多分、敵のミサイルは正面を中心に

配備していると思うから、これだけで

敵をつぶせる。

72機の貨物船の体当たりなどという

攻撃は、多分彼らも想定していないだろう。

たとえ71機やられても、あとの1機が

ぶつかれば、それで済まないだ」

ローリン「広い宇宙の中で、いくら大きいと言っても敵の宇宙船は、ゴミみたいなもの。そんなにうまくいくんだろうか」

アルメンダリス「それは、数理モデルで、敵の進入角度、速度、こちらの貨物船の速度、それらのベクトルをプログラムに入れて何千回も計算し尽くした。

この数式をマーズ53号のオリンに仕込んでいる。

オリンはその時になれば、72機の貨物船に指令を出して攻撃する。

すべての船に人間は乗っていない。

まず間違いないだろう」

市長「それでも万一72機全部が打ち落と

されたら・・・」

鉄男「そのときは、マーズ・シャトルで、私が攻撃する手はず。

シャトルのステルス塗装も完了しています。

心配ありません、市長」

市長「あなた一人にそんな重荷を背負わせる

のは・・・」

鉄男「私が火星に来たのは、このためです。

例えば11年前、JAXAの福井さんに

頼まれて、火星までやって来たことに、

悔いはありません。

このために私はやって来たんだと、何回も

決意を固めました。

怖いものはありません。

ただ一つ、近しいソアさんのことが心配です。

万一私が死んだときは、彼女のことをよろ

しくお願いします」

市長「わかってるわ」

鉄男「じゃあ、明日の出発の準備もあります

ので、これで失礼します」

市長「ありがとう、ほんとにありがとう」

一同とハグをかわして出てゆく鉄男。

○ジェシーとステフの家の居間（朝）

ステフの携帯が鳴る。

発信元を確かめて通話ボタンを押す。

ステフ「テットオ？」

鉄男「やあ。ステファニーさん。

鉄男です。

今、空港のマーズ・シャトルから留守番録音にかけています。

お世話になった皆さんにこんな風に電話をかけています。

あなたが最後です。

今からアメリカ・イスラエル軍迎撃に向かいます。

逢って挨拶すると、多分泣かれると辛いので、電話で失礼します。

マーズ8号では、お世話になりました。

命も助けてもらいました。

ほんとに有難うございました。

子供のいない私には、キャリーとの生活は得難い体験でした。

これからもジェシーと仲良く生活されることを祈っています。

生きていたら、また、逢いましょう。

では――

そこで通話は途切れる。

呆然と立ち尽くすステフ。

涙が頬を伝う。

突然轟音が。

窓をみると、たくさんの着陸船が緑の空へ駆けのぼってゆく。

そして最後にマーズ・シャトルが登ってゆく。

○火星上空10万kmの宇宙

遙か彼方から、玉子型の巨大な宇宙船が近づく。

それにつれて、貨物機の隊列が、少しずつ距離を変えて、迎撃態勢に。

○マーズ・シャトル操縦室

操縦席の鉄男。シャトルを敵の船の後方にテレポートさせる。

敵の船を取り囲むように、貨物船が待ち受ける。

最初の貨物機の近辺に差し掛かった時、その貨物機が発進。

50 kmの距離に近づいた時、玉子型の船の横腹のキャノピーとおぼしき位置から強烈な光が発せられ、瞬時に貨物機に到達。
貨物機は砕け散る。

鉄男「リンカーン、あの光は何だ！」

リンカーン「レーザー・ガンです」

鉄男「レーザー！」

と言う間に、左右上下の貨物機に、レーザー光が浴びせられ、破壊される。

鉄男「なんとのことだ。」

ということは、レーザー砲は左右上下に装備されていると！」

時間がたつにつれ、次々と貨物機が破壊されてゆく。

鉄男「リンカーン、なんとかならないか」

リンカーン「貨物機の速度より、レーザー光の速度が速いので、手の施しようがありません」

鉄男「ん？

敵の船の速度が落ちた！」

リンカーン「着陸に備えているのでしよう」

そして1時間の内に、すべての貨物船が撃破される。

突然東キャナルから通信が入る。

ローリン「岡田さん、駄目でしたね。

しかたない。

火星に戻ってください」

鉄男「・・・・・・」

最後の手段が残っています」

ローリン「え？」

鉄男「この位置から、敵の船の大きい噴射

ノズルが見えています。

あそこはレーザー砲の死角になっています。

あそこへ突っ込んだら・・・」

ローリン「岡田さん！」

鉄男「そうしましょう。

ステルス化したこのフェリーボートは、まだ検知されていないようです。

今がチャンスです」

市長「ちよつと待ってください！」

鉄男「いや、待てません。

特にイスラエル兵の残虐性は世間の知るところです。

このまま着陸したら、彼らは無差別に人を殺し始めます。

絶対そのようなことは許せません。

激突してレポートして逃げられるかど

うかわかりません。

あなたがたの許可はいりません。

それでは」

と通信スイッチを切ろうとすると、

ソア「鉄ちゃん！」

鉄男「え？ ソアちゃん！

なんでそこに！」

ソア「鉄ちゃん！」

鉄男「君とのお別れは昨日言ったはずだ。

止めないでくれ」

ソア「止めやしないわ。

絶対相手を破壊するのよ！

みんなのために！」

鉄男「よく言ってくれた。

これで心置きなく立ち向かえる。

最後の瞬間にテレポートで逃げられる

かどうかはわからない。

ソアちゃん、さようなら！」

ソア「鉄ちゃん！」

泣き崩れるソア。

通信スイッチを切る鉄男。

宇宙服のヘルメットを取り、隠してお

いたウィスキーボトルを取り出し、一

口飲む。

鉄男「ジョン、ありがとう。

末期の酒だ」

グイと飲み込んで、敵の船の青いノズルを睨みつける。

そしてテレポート。

目の前の灼熱のノズル。

テレポートが一瞬遅れて、マーズ・シ

ヤトル共々、鉄男はノズルに突っ込む。

そして大爆発。

○東キャナル市庁舎屋上

市長やローリン等が、天空に明るく輝

く火の玉を仰ぎ見る。

ローリン「岡田さんは逃げられたのか？」

市長「わからない。

わからない」

そばで泣き崩れるソア。

緑の空に咲いた火の玉は、しばらく咲

いていた。

テレポーターション・マン 完